

中医学入門講義

東洋堂土方医院 土方康世

リニューアル第9回

第4章 疾病と病因

ナビゲーター：戸城えりこ ERIクリニック

コメンテーター：仲尾真美代 しずく堂薬局堺駅前店

アドバイザー：山崎武俊 洛和会音羽リハビリテーション病院

目次 改訂中医学基礎、中医学入門(第2版)を主に参考とした。

緒論

I. 中医学の歴史

II. 中医学基礎の概要

III. 中医学理論の基本的特徴

上篇 基本理論

第一章 気・血・津・液

第二章 経絡

第三章 臓腑

第四章 疾病の病因病理

第五章 陰陽五行学説

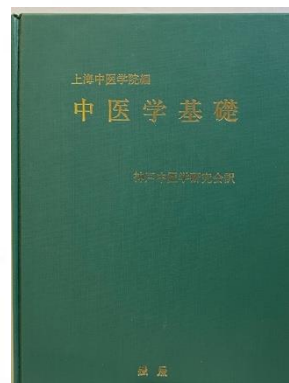
下篇 弁証論治

第六章 四診

第七章 八綱弁証

第八章 気血弁証

第九章 臓腑弁証



第十章 病邪弁証

第十一章 外感熱病弁証

第十二章 治則と治法

うめだ中医学勉強会 2013年4月—2018年1月

第1回	2013年 中医学の歴史 中医学基礎の概要 中医学理論の 4月 基本的特徴 気・血・津・液・精
第2回	2013年 気血津液精 陰陽五行説 6月
第3回	2013年 五行理論、経絡 9月
第4回	2013年 臓腑と臓腑弁証 第1節 心 11月
第5回	2014年 臓腑と臓腑弁証 第2節 肺 1月
第6回	2014年 臓腑と臓腑弁証 第3節 脾胃 3月
第7回	2014年 臓腑と臓腑弁証 第4節 肝胆 5月
第8回	2014年 臓腑と臓腑弁証 第5節 腎 7月
第9回	2014年 第4章 疾病と病因 9月
第10回	2014年 第4章 疾病と病因-2 11月
第11回	2015年 五行理論の臨床応用 1月
第12回	2015年 五行学説理解のための説明 3月
第13回	2015年 五行学説理解のための説明 臓腑弁証ほか(脾肺、 5月 大腸)
第14回	2015年 相生・相剋・相乗・相侮の症例検討、五行理論を 7月 使った 治療戦略
第15回	2015年 脈診 9月

第16回	2015年 舌診 11月
第17回	2016年 脳 子宮 三焦 1月
第18回	2016年 八綱弁証 3月
第19回	2016年 気血弁証 5月
第20回	2016年 臓腑弁証 心小腸 7月
第21回	2016年 臓腑弁証 肺大腸 9月
第22回	2016年 臓腑弁証 腎と膀胱 11月
第23回	2017年 病邪弁証 風寒 1月
第24回	2017年 病邪弁証 六淫(湿、熱/火、燥) 3月
第25回	2017年 病邪弁証 六淫(食積、気滯、血瘀、痰飲、水腫) 5月
第26回	2017年 靈梅参について 7月
第27回	2017年 傷寒論と温病、六経弁証 9月
第28回	2017年 外感熱病弁証 11月
第29回	2018年 衛気営血弁証 1月
残り部分	治則(正治反治、祛邪扶正、調整陰陽)と治法 (汗法、清法、下法、和法、温法、補法、消法、開 竅法、固澀法、鎮納法)

第4章 病因と発病の過程

1.病因

疾病の発生原因は多種多様であるが、主なものに六淫、七情、飲食、労倦、外傷などがある。

(1)六淫

風・暑・湿・燥・寒・火の6つの邪気を指す。

外邪とは、季節の変化によって現れるものを指し、正常な状態では六気となるが、これが人体にとって「邪」となり、悪い影響を及ぼした場合(病気の原因)に六淫となり、それで病気になるとき「外感六淫」という。

また、内の邪とは、六淫とよく似た原因が体内に存在し、体内で生まれた「邪」を指す。これを、「内生_{ないせい}五邪」(内風・内湿、内燥、内熱≡内火、内寒)という。

外感六淫の特徴

- ① 六淫による疾病は多くは季節や気候や環境と関係し、しばしば季節独特の邪気が認められる。
- ② 六つの邪気は一種でも人体に入ると病気になるが、二種類以上同時侵入することもある。
- ③ 発病の過程で、体外にも影響し、一定の条件下では風が熱に、湿が熱に転化しあうこともある。
- ④ 侵入部位は体表あるいは口や鼻なので外感六淫と呼ばれる。
 - ▶外感六淫＝外的環境からくる風・暑・湿・燥・寒・火により病気になること

▶内生五邪＝代謝不良による病理産物が原因となることが多い
(瘀血、痰飲→ 内風、内湿、内燥、内熱≡内火、内寒?)

内生五邪の特徴

- ① 人間も自然の一部であるから、六淫と同じような現象が、人体において起こる。
- ② 「邪」を作る原因は、体内にある。
- ③ 同じような性質の外邪と結び付いて、その障害を悪化させる。

①風

春を代表する気「春一番」のように、季節的な違いはあるが、一年中風は存在し、他の邪気と組み合わせさせて体に侵入してくる。

- a.体の上部や外部(陽の部分・・・頭や顔のこと)を犯す「花粉症」
- b.風のように絶えず動き、変化する。患部が一定せず、場所があちこちに變化し、病状の進行が早い。
- c.「風は百病の長」他の邪気の先導役となり体に侵入する

▶他の邪気と組み合わせると様々な邪気に変化する

(邪気だけでは体に入りにくいですが風邪があると、皮膚をこじ開けてくれるので入りやすくなる)「

風熱」「風寒」「風湿」「風寒湿」「風燥」など。

※内風 めまいも体の上部で突然起こり、体の痙攣症状「足がつる、ひきつけを起こす、瞼がぴくぴくする」なども突然おこる。内の原因で起こるが、特徴が外風に似るので内風という。

②暑

夏に限定され、火熱の性質を持つ。

a.陽性の邪気(熱毒邪)→熱中症

b.昇散に動き、気を消耗し、津液を傷つける。

暑い夏は、発汗により、気と津液の消耗が激しくなる。

c.暑は湿を伴うことが多い。湿は重く、体内にあると倦怠感になる

※内外の区別はない。

③湿

長夏(梅雨)の気。春と秋が交わる時期に、暑さが納まり、湿度だけが上がる季節。外湿と内湿に分かれる。

a.重く濁っている。

頭や体が重だるく感じる。湿に侵されると分泌液が多くなり、

濁ってくる。湿が熱と合わさると、濁となり匂いが強くなる

→おりもの、鼻水、痰(だるい、重い)

b.粘滞性がある。

ねばねばで気の巡りを妨げ、しかも除去しにくい。症状を長引かせる。

c.人体の下部を犯す

湿は重い為、陰部を含めた下半身に症状がでやすい→下肢の浮腫

陰の邪気なので、陽気を傷つける(冷える)

※内湿 脾胃の運化(消化)が悪くなった時に湿が発生しやすい→下痢を引き起こすこともある

④燥

秋を代表する気。

- a.口や鼻から侵入し、肺を犯す(乾燥の気を吸い込むと肺がやられる)
- b.乾いているので、津液に乾燥させて、粘膜や皮膚を乾燥させる
- c.肺を傷つけやすい。肺は潤いを好み、乾燥を嫌う。燥邪が侵入すると、空咳、喀痰しにくいなどの症状がみられる。時には血痰が生じる(乾燥で肺血管が傷害される)

※内燥 津液などの「陰」が失われることにより体内の乾燥状況が生まれること。陰が少なくなるので、「熱」が生まれていることが多いため、「内熱」として扱われることが多い。

⑤寒

冬を代表する気。内寒と外寒に分かれる。

- a.陽気を傷つける→体の冷え、下痢
- b.凝滞性を持つ(ちぢこまらせる)

体内の気血の流れを途絶しようとする。通らないところに痛みが起こる。

「不通即痛」温めると治る月経痛→寒邪が血瘀を作り気を通さない

- c.収引性を持つ(収縮・牽引・引っ張られる)

寒邪による体の痛み・毛穴を閉じさせる・関節の動きを悪くし、屈伸しにくくする。

▶胃痙攣、関節痛(冷えると起こる)

※内寒 体内の陽気が何らかの原因により不足することが原因で、外寒のような症状が現れる。代謝が悪くなり熱エネルギーが発生しなくなる。

⑥熱(火)

火と熱は共に陽が盛んになったときに生じるものであるため、同じ扱いをされることが多い。しかし、違いを示す場合は熱の程度で区別される。熱は温を強くしたもの、火は熱を極めたもの。熱を使う場合は外からの侵入が多いが、火をつかうときは内に生じたものに対して使う。(例えば、心火、肝火など)内外の区別がある。

- a.陽性の邪気で炎上しやすい。高熱などが出る以外に、脳に上がり、神明(意識)を乱し、いらいらや不眠などの症状がでる→辛いものを多食するといらいらする原因となることがある
 - b.気と津液を消耗する。のどが渇く、尿が少なく色が濃い、便秘などの症状がでる
(腸燥—兎糞便)。
 - c.火は風を生みやすく、熱を含んだ風によって血行が過剰になり、出血傾向となる。陽性の邪気であるため、陰液の消耗が激しく、筋脈の潤いが失われ、肝風を生じやすくなり、高熱、ひきつけなどが発現する(肝風は脳の症状が多い)。
 - d.火は腫瘍を作りやすい。火熱が血に入り、一か所に集まって患部が赤く腫れて熱を持つ。
- ※内熱 体内の陰が消耗すると、熱の過剰な発生を止められなくなり、内熱となることがある。

(2) 癘気

強烈な伝染力を持った一種の病邪。昔は伝染病の原因が分からなかった為、それらを総称してそう呼んだ。現代のウイルスや病原菌にあてはまり、強い伝染力、激しい症状がある。

(3) 七情内傷

七情とは喜、怒、憂、思、悲、恐、驚の七種類の感情の変化を指す。それぞれの感情はそれに結び付く臓器があり、その臓器を傷つけやすい。また、感情は「肝」との関係が深く、その変化により、血への影響も考えられ、気も影響される。他にも感情の変化で病状の悪化を引き起こすこともある

▶七情と五臓

肝：怒

怒れば気が上がり肝気が昇発し、血が気によって上逆する

○短気・おどおどする・不眠

心：喜

喜びすぎると気が緩み、血脈が弛緩し、心気を保つことができなくなる。異様な笑い。

○心配性、不安、異様な笑い

肺：悲・憂

悲しめば肺気を消耗し、気が弱まり活力がなくなる。

○息切れ・胸部苦悶・四肢無力・だるい

脾：思

思えば気が結し、脾が傷ついて、運化が弱まり飲食物が停滞して気の流れが滞る。

○食欲減退・胃もたれ、話が長い、話が通じない

腎：恐・驚

恐れれば気が下り、腎を傷つけて腎気が固まらず、気が下降する。

驚けば気が乱れて腎を傷つけて、志が蔵されなくなり、意向が定まらず、心腎が交わらない。心が慌てて混乱する。

○大小便の失禁・不安感、無気力、恐怖、うつ、ひきこもり、だるい、動けない、パニック症候群

(4) 飲食、労逸

食べ過ぎや栄養失調、偏食などが飲食の原因となる。

労逸には、労と逸の両面があり、労は過労、逸は安逸すぎることを指す。つまり、適度な運動が人体には必要である。

▶だらだらと体を休めることだけが養生ではない。

逆に病気になる(運動不足のメタボ)

(5) 外傷

打撲など金物による傷も含む。傷は出血すると炎症(湿熱)や血流鬱滞(血瘀)を作る。

(6) 瘀血・痰飲

① 瘀血

体内に血液の停滞が見られること。出血によるものも含む。原因としては、気の不足（流れる力が足りない）血の量が足りない（流れるもの自体が少ない）、熱が体内に入り血行を乱す（出血傾向）、寒が体内に存在する（血が凝滞し、循環が悪い）などが考えられる。

瘀血の特徴も存在する部位により違いがあるが、共通するものとして、疼痛（場所が固定していて、刺すような痛み）、患部を押されることを拒む（拒按）、夜間にひどくなる、局部に青紫色の腫れ、塊の触感がある。出血には血の塊を伴う。舌に瘀点、瘀斑などが見られる。

② 痰飲

痰と飲は水の代謝障害によって生じる病理的産物である。濃い物を痰、薄い物を飲と呼ぶ。痰飲は人体のどこにでも存在し得るもので、停滞した場所により違う名前と呼ばれる。さらに、痰は目に見える痰以外に、目に見えない痰が存在する。腫瘍や脂肪腫、筋腫などの「できもの」（変質痰）も含まれる。痰や飲の特徴は、停滞した場所により違った症状が出現するが、共通する症状としては、舌苔の滑膩、脈の滑や弦などがある。

様々な瘀血

- 夜間にひどい→動かないから（睡眠など）
- 気の推动作用の不足→疲れると悪化するかどうか？
- 血不足による瘀血（血流がうまく行かない）

2.発病の原理

(1)正と邪のバランス

- ①人の抵抗力＝正気である。正気の不足は疾病の発生の根源である。邪気が侵入できるのは正気の抵抗の不足のため。体の不調により抵抗力は衰えてゆき、病気になりやすくなる。
- ②邪気は発病の重要な条件である。正気は発病の過程の中で主導権を握るが、邪気も重要な作用を持つ。伝染病や外傷は抵抗力ではどうにもならないことが多い。
- ③正気と邪気の勝負で発病するかどうかが決まる。正気が勝てば発病しないし、邪気が勝てば発病する。体質によって発病重症度も異なるため、正気の強弱は回復の早さをも左右する。

(2)内外の環境と発病

内環境は人体の正気を指す。人は昔から自然と調和して暮らしてきたが、その自然環境の変化や汚染によって発病するということがある。気候、地域性、生活、仕事環境などが外環境も発病に関与。一般的にいうと体質と精神状態が正気の強弱を決定している。

○北海道と沖縄、都会と田舎

▶診断には症状だけではなく、どのような状況(外環境)から症状がでるのかを把握することも重要である。

①体質と正気

体質の強壮は、臓腑の活動が盛んで、精、気血、津液などが充実していることを示し、正気も強い。その逆に、虚弱体質は気血津液が不足し、正気も弱い。体質は先天的なものと、後天的な栄養状態や運動も関与している。

②精神状態と正気

精神状態は、感情の直接的な影響を受ける。精神状態が良いと、体の気の巡りが良く、気血は調和し、臓腑の機能も正常に働く。このため正気は強くなる。逆に精神状態が悪いと気が詰まり、体調が悪くなる。よって、正気も弱くなるのである。

Text1

=

PP1

第四章 疾病と病因

人体の正常状態では、

陰陽・気血・臓腑・経絡などが相互依存・相互制約による相対的な平衡状態にある。

→〈素問・生氣通天論〉「陰平かに陽秘すれば、精神治まる」

同時に、

人体の生理活動と外界の環境の間にも密接な関連性があり、正常状態においては相対的な平衡状態が保たれている。この平衡状態が破壊され、すぐに自動的な整復が出来ないときは、疾病が発生する内在的根拠となる

→〈素問・調経論〉「血气和せざれば、百病すなわち変化して生ず」

→〈素問・四気調神大論〉「陰陽四時は、万物の終始なり、死生の本なり、これに逆らえばすなわち災害生じ、これに従えばすなわち苛疾起こらず」

正常状態が破壊され、疾病が発生するには、一定の条件が必要→病因

病因には、三因ある→外因・内因・不内外因

外因：外感六淫と瘴氣、

内因；内傷七情

不内外因：飲食失調・勞倦・房室不節・外傷・寄生虫

その他：瘀血・痰飲など病理的産物

第四章 疾病と病因

人体の正常状態では、陰陽・気血・臓腑・経絡などが相互依存・相互制約による相対的な平衡状態にある。

→〈素問・生氣通天論〉「陰平かに陽秘すれば、精神治まる」
人体の生理活動と外界の環境の間にも密接な関連性があり、
正常状態においては相対的な平衡状態が保たれている。

この平衡状態が破壊され、すぐに自動的な整復が出来ないとき
は、疾病が発生する内在的根拠となる。

→〈素問・調経論〉「血氣和せざれば、百病すなわち変化して生ず」、
〈素問・四氣調神大論〉「陰陽四時は、万物の終始なり、死生の本なり、これに逆らえばすなわち災害生じ、これに従えばすなわち苛疾起こらず」:

正常状態が破壊され、疾病が発生するには、一定の条件が必要

→病因→①外因(外感六淫と癘氣),②内因(内傷七情),

③不内外因(飲食失調・勞倦・房室不節・外傷・寄生虫)

④その他(瘀血・痰飲等 病理的産物)



第一節 病因

1. 六淫と瘧氣

六淫とは「風・寒・暑・湿・燥・火」の邪である。 } 外邪
瘧氣=戾氣（強い伝染力を持つ病邪のこと） }

此の概念の形成には、古代人の長期にわたる観察に基づき、自然界の運動変化が直接・間接に人体に影響し、陰陽・気血・経絡・臓腑などに一定の変化を生じるという認識が基礎になっている。

〈靈樞・五癰津液別篇〉「天暑く衣厚ければ、すなわち湊理開き、ゆえに汗出づ」「天寒ければすなわち湊理閉じ、気は洩りて行らず、水は下り膀胱に留まり、すなわち溺（でき）と気になる」→春・夏のように陽気が排泄する時期には気血は表に向かいやすく、皮膚はゆるみ汗腺が開いて汗が多いが、秋・冬のように陽気が収蔵する季節には気血が裏に向かいやすく、皮膚がしまり汗腺は開きにくく汗が少ないことを説明している。このような生理変化は、外界の気候の影響に対し人体が適応するために調節していることを示唆する。

もし、外界の環境変化が急激で正常範囲を超えていると（例えば、冬の寒さ・夏の暑さが異常である・寒いはずの冬が暖かい・暑いはずの夏に冷える）、人体の調節機能が低下している時には発病因子となる。

外感六淫学説は、人間と自然関係の認識のもとに、さまざまな臨床上の現象を総合分析して概括された。

風・寒・暑・湿・燥・火（六氣）は古代人が自然界の気候変化を概括したものである。六氣が発病因子となったときのみ、六淫（風淫・寒淫・暑淫・湿淫・燥淫・火淫）という。六淫が起こす病氣は、夏には暑病が、冬には寒病が多いという一定の季節性がみられる。しかし、自然界の気候変化は複雑で、生活環境・精神的素因・身体の抵抗力・体質素因といった個体差もある。同じ季節に同じ外邪を感受して同じ疾病が発生することもあり、異なった外邪を感受して異なった疾病にかかることもある。古代において、異なった臨床症状に応じたそれぞれの病因を探索して、風邪・寒邪・暑邪・湿邪・燥邪などの六種に分類帰納し、「外感病」と統称した。

「^{ごゆうか}癘氣」とは明代・吳又可が提示した病因である。つまり流行性の疾患を「瘟疫」と称し、病因は六淫ではなく「癘氣（戾氣）」であり、伝染経路は口鼻からとした。瘟疫が流行していない一般的情况では、自然界には「雜氣」が存在しており、外感病はこの「雜氣」が侵入して発生し、この疾病の方が六淫によるものよりも多く、「雜氣」の種類が異なると疾病も異なるとし、「一病一氣」の説を唱えた。顕微鏡のない当時としては、素晴らしい見解というべきである。六淫邪による外感病（外感六淫）の概念は大きく発展し、弁証論治も進歩した。臨床的には各種外邪の特性と発病の特徴にもとづいて、外感病の症候を分析し、どの病邪による疾病かを弁別したうえで、病邪に応じて祛風・散寒・化湿・清熱・潤燥・瀉火などの治法を採用した。この過程を「弁証救因、審因論治」という。近年の臨床経験による細菌・ウイルスなどの感染症の絶対多数が外感六淫の範疇に入り、病邪にもとづく弁証論治が良好な結果をもたらすことが明らかになっている。

この他注意すべきは、外感病ではなくて風・寒・暑・湿・燥・火に類似した症候が現れることがあり、これを内風・内寒・内湿・内燥・内火（内熱）と称している。

癘氣による疫癘
ジフテリア、痘瘡、疫痢、猩紅熱
（1型－3型感染症の類）

第一節 病因について。

1. 外因：六淫と癘氣

六淫とは「風・寒・暑・湿・燥・火」の邪である。

癘氣=戾氣(強い伝染力を持つ病邪のこと)

此の概念の形成には、古代人の長期にわたる観察に基づき、自然界の運動変化が直接・間接に人体に影響し、陰陽・気血・経絡・臓腑などに一定の変化を生じるという認識が基礎になっている。

〈靈樞・五癰津液別篇〉→春・夏のように陽氣が排泄する時期には気血は表に向かいやすく、皮膚はゆるみ汗腺が開き発汗多いが、秋・冬時の陽氣が収蔵する季節には気血が裏に向かいやすく、皮膚がしまり汗腺は開きにくく汗が少ない。

このような生理変化は、外界の気候の影響に対し人体が適応するために調節していることを示唆。この外界の環境変化が急激で正常範囲を超えていると(極寒・夏の暑さが異常・暖冬・冷夏)、人体の調節機能が低下している時には発病因子となる。

外感六淫学説は、人間と自然関係の認識のもとに、さまざまな臨床上の現象を総合分析して概括された。

風・寒・暑・湿・燥・火(六気)は古代人が自然界の気候変化を概括したもの。

六気が発病因子となったときのみ、六淫(風淫・寒淫・暑淫・湿淫・燥淫・火淫)という。

六淫が起こす病気は、夏には暑病が、冬には寒病が多いという一定の季節性がみられる。しかし、自然界の気候変化は複雑で、生活環境・精神的素因・身体の抵抗力・体質素因といった個体差もある。

古代において、異なった臨床症状に応じたそれぞれの病因を探索して、風邪・寒邪・暑邪・湿邪・燥邪などの六種に分類帰納し、「外感病」と統称した。

「癘氣」とは明代・吳又可が提示した病因。流行性疾患を「瘟疫」と称し、病因は六淫ではなく「癘氣(戾氣)」であり、伝染経路は口鼻からとした。

瘟疫が流行してない一般的情况で、自然界には「雑気」が存在しており、外感病はこの「雑気」が侵入して発生、雑気疾病の方が六淫疾病より多く、「雑気」の種類が異なると疾病も異なり、「一病一気」の説を唱えた(顕微鏡のない当時としては、素晴らしい見解)。

六淫邪による外感病(外感六淫)の概念は大きく発展し、弁証論治も進歩、臨床的には各種外邪の特性と発病の特徴に基き、外感病の症候を分析、病邪別による疾病を弁別し、病邪に応じ祛風・散寒・化湿・清熱・潤燥・瀉火などの治法を採用。

この過程を「弁証救因、審因論治」という。

近年の臨床経験による細菌・ウイルスなどの感染症の絶対多数が外感六淫の範疇に入る。

この他注意すべきは、非外感病で風・寒・暑・湿・燥・火に類似した症候が現れることがあり、これを内風・内寒・内湿・内燥・内火(内熱)と称している。



1) 風邪

風邪による発病の特徴と症候は、自然界の「風」がひきおこす現象に類似している。「風」は去来が早く流動性が大きく、吹いたり止んだり一定せず、樹梢を動かすという特性があるので、以下のような症候を風邪による発病の特徴として把握する。

①急に発病し、変化が早い。

「風はよく行りて数変ず」と称される。よくめぐりて（うつりて）しばしばへんず

②けいれん（抽搐）・振せん・頭の揺れ（搖頭）・めまい（眩暈）・遊走性の疼痛や搔痒など

③人体の高位や肌表部を犯しやすい（内風の場合は熱が関与するため？）。

頭部・肺（臓の上部）・皮膚などの病変を生じ易い。

疾病に上記特徴がみられれば、一般には風邪による病変であるとみなせる。

古代においては、この種の症候をすべて自然界の「風」によると考えたが、後世になり認識が進むと、体内の陽気の昇動が過度になっても類似の症状が出現するという見解に達した。例えば、肝陽・肝火が化風するとめまい・振せん・けいれんなどがあらわれるので「肝風」と称し、高熱によるけいれん・頸項部の強直などの症状が生じるので「熱極生風」という。これらは外来風邪によるものではなく、ある種疾病の経過において生じる病理的症候であるから、「内風」という。（

1) 風邪 (外感六淫の1つ)

風とは、自然界を流動する気流で、春期の主気で四季を通じて存在する。風邪による発病は春期に最も多く、他の季節においても外感病の重要な病因の1つである。風邪による発病の特徴は自然界における風の特性と密接な関係がある。

- ①風は陽邪で、陽位 (上部・肌腠・肺・陽の経絡) を犯しやすく、その性は開泄する。
- ②風性は善く行り数数変ず。
- ③風性は動を主る。
- ④風は百病の長である。
- ⑤風は肝と相応する。
- ⑥外風と内風がある。

PP7-9、症例を挟んで
PP14-15 に解説あり

事物の陰陽の属性の例

陰陽は極めて大雑把な概念

分類	空間	時間	季節	性別	温度	重さ	明るさ	事物の運動状態
陽	天	昼	春 夏	男	暖 熱	軽い	明	上昇 外向 動
陰	地	夜	秋 冬	女	涼 寒	重い	暗	下降 内向 静

人体の部位・組織構造・生理活動などの陰陽

分類	部位	組織構造	生理機能
陽	表 背部 上部	皮毛 六腑 気 衛	興奮 亢進 活動
陰	裏 腹部 下部	筋骨 五臓 血 営	抑制 衰退 静止

分類	病変の性質	脈 象
陽	表証 実証 熱証	浮 数 滑 実 洪大
陰	裏証 虚証 寒証	沈 遅 澁 虚 細小

又、物質は陰、機能は陽に属する(血液は陰、血流は陽)

①風は陽邪で、陽位を犯しやすく、その性は開泄するとは

1. 風は昇発を主り、腠理を開泄するため発汗・悪風する。
風邪 が頭面部を障害すると、頭のふらつき・頭痛・口眼
喎斜〔顔面麻痺〕が、肺を犯すと鼻閉・鼻水・咽の痒み・
咳嗽などの肺気不宣がみられる。

2. 風性は善く行り数数変ず。

風は流動する特徴を持つので、風邪による病変は、症状
の変化が多く、発病も急激で変化も早い。

例えば、風邪が経絡を侵襲すると突然に口眼喎斜が生じ
「中風」「中経絡」と称する。

3. 風性は動を主る(変化が速いこと)。

風邪による病変は、動揺して定まらないという特徴をもち、めまい・振戦(ふるえ)・四肢けいれん、甚だしければ後弓反張・上方注視などの症状が現れやすい(現代医学的には脳血管障害)。

例えば風邪と熱邪による外感病の風温では高熱と共に、意識障害・けいれんを呈する“熱極生風”がみられ、内傷雑病の肝陽化風(ストレス溜まり→肝鬱火化→肝陰虚→肝陽上亢→肝風内動)が原因・血虚生風などでもふらつき・めまい・振戦などが発生する。〔素問・陰陽応象大論〕に「風勝れば則ち動く」とあるのに相当する。

4. 風は百病の長である

風邪は単独で病変を引き起こすことは少なく、多くの外感病の先導になって六淫(風・寒・暑・湿・燥・火)などの邪とともに人体を侵襲する。

外感病では寒・湿・燥・熱などの邪は風邪がもつ開泄の助けを得て病変を引き起こし、風寒・風濕・風燥・風熱の邪となって侵襲する(寒い環境下強風が起こって発病:風寒邪)。

風邪は六淫邪兼挟するだけでなく、病理産物例えば、痰と合して(内)風痰になり、経絡に流竄(ざん)(流刑)して四肢麻痺、半身不随などを、心竅(心の穴:現代医学的には脳)を蒙蔽して意識障害などを引き起こす。

痰迷心竅症例 未熟児(Rh-)。

未熟児＝生まれつき腎虚

4歳でプールで水泳後発熱続く。頸部硬直目は左に寄ったまま。(肝風内動;熱極生風。肝陰血虚→筋脈失養)。

3日間意識不明(竅道に痰湿たまる)。

意識回復後知力低下。高熱4ヶ月続く。

筋膜炎(肝陰血虚後筋肉のひきつり痺れの変形?)。

心外膜炎の他色々な場所での筋膜炎があった。

短時間の意識消失発作が頻回(竅道不通→循環不全)。

16歳で足がパンパンに腫れた(腎虚水沍・痰湿内阻)。

17歳まで高熱が時折続いた(痰湿化熱)後解熱したが、身体のおちこちの筋膜炎が痛んだ(熱→傷陰→陰虚に因る血脈不利)。夕方になると疲れる(気血虚)。

緊張で悪化(肝失疏泄→痰湿内阻)。

排便尿で痛み消失(祛湿化痰されるから)。尿量少なくでにくい(腎虚水沍・痰湿内阻)。水を飲むと悪心(痰湿内阻)。

肩首凝る(気虚血瘀・筋脈失養。左側頭部に異常脳波がある(痰湿内阻)。月経時の膈の痛み(血瘀?)

舌体: 稍淡胖(血虚湿滞)、稍嫩(気虚)。

舌苔: 少苔(陰不足)、

脈: 左稍滑(痰湿)、右寸・関: 弱、尺: 微(腎気虚)。

弁証: 気血(虚)。痰湿内阻、筋脈失養、肝失疏泄

治法: 益気(A)、養血(B)、祛湿(C)、祛痰(D)、疏肝(E)、開竅道(F)

薬方: 柴胡(E)、半夏(D)、黄芩(C)、甘草、乾姜(C・散寒)、人參(A)、茯苓(C)、沢瀉(C)、白朮(C,A)、桂枝(温通)、黄耆(A)、郁金(E)、石菖蒲(C、F)、白芍(B)、白姜蚕(化痰・祛風)、山梔子、(C)、当帰(B・活血)、桃仁(活血)牡丹皮(活血)、木瓜(D、舒筋活絡) 小柴胡・桂枝茯苓丸・五苓散

経過: 完全ではないがかなりQOLが改善。月経前は症状悪化し易い。多重人格(抗てんかん薬副作用?)。

小柴胡湯＋桂枝茯苓丸＋五苓散 生姜→乾姜 蒼朮→白朮 去大棗
加黄耆、郁金、石菖蒲、白姜蚕、山梔子、木瓜

最初の頃は、舌を前に出してと言っても、出すことが出来なかった。最近はしっかり、前に突き出すことが出来る。

当初、体のいろんな場所が痛む時、患部はむくんだ感じを呈している。

そこを母親にマッサージしてもらおうと、痛みがとれると共に、尿意を催し排尿後何事も無かったかのように楽になった。

最初受診時は、自力歩行不可で母親に抱えられて受診した。

其の時柴苓湯加減方を2週間分投与した。2週間後は自力歩行可能で、一人で受診した。

現在40才を過ぎたが、過去、はるみちゃん、？ちゃん、？？ちゃんなど別人格が常にいて、色々話し合っていたらしい。

(母親談、本人も肯定している)。

「今までは、理屈が通らず困っていたが、最近は、善悪、人

心の痰証

痰が心の「神を主る」機能を障害。「痰濁蒙蔽心竅」。意識障害・痙攣を主徴とする。脳の代謝障害・脳血管障害・脳浮腫⁴などが関連すると推察。高血圧性脳症・脳卒中・熱性痙攣・脳軟化症・癲癇などで見られる。

痰迷心竅(痰濁が心竅を閉塞)

飲食不摂生・内傷七情→脾失健運→水湿停滞→生痰(痰迷心竅)

(主症状): 独り言・痴呆・行動異常・情緒異常(急性だと突然の意識消失・運動知覚麻痺を伴う)。喉がゴロゴロ

口いう。舌苔白膩。舌胖大・淡紅・脈滑 天然樹脂・香料

(論治): 滌痰開竅 温性芳香開竅薬(蘇合香・麝香²・菖蒲安息香)

+ 温性化痰薬 (半夏・天南星・白附子)+理気薬

(檀香・沉香・丁香・木香・乳香・没薬・香附子)

(処方): 滌痰湯(半夏・胆南星・橘紅・枳実・茯苓・人参・菖蒲・

竹茹・甘草) 意識喪失には蘇合香丸

第4回資料より

附表2 心の病証—虚証・実証あるいは虚実挟雜

弁証	主症状	治療原則	代表方剂
心気虚	心気不足で心機能の衰退・血液運行が低下する。主症状は動悸・脈結代・息ぎれ・不安感・易発汗・細脈・動くと症状が増悪・舌質淡胖・脈虚弱。	補益心気 養心安神	養心湯 炙甘草湯
心陽虚	心気虚の症状以外に、顔色が灰暗または青紫・四肢の冷え・舌質淡暗胖大・冷や汗などの寒証がみられる。脈細弱あるいは結代。	温通心陽 養心安神	炙甘草湯 参附湯 附子理中湯
心肺気虚	心気虚の症状とともに、肺気虚の症状（咳嗽・呼吸困難など）の症状がある。	補益心肺	炙甘草湯 補中益気湯 参蚘散
心腎陽虚	心陽虚の症状とともに、腎気虚の症状である浮腫・尿量減少などが現れる。	温補心腎	真武湯＋炙甘草湯
心血虚	単純な心血虚損であり、心神に栄養を供給できず心神不安となる。めまい・動悸・健忘・不眠・多夢・顔面蒼白・脈弱無力・舌質偏淡。	補血益気	帰脾湯・四物湯 （＋酸棗仁・柏子仁）
心陰虚	心の陰血虚損があり、陽を制することができず虚陽が興奮して虚熱の症状を伴う。めまい・動悸・不眠・のぼせ・焦燥感・五心煩熱・咽の乾燥・盗汗・脈細数・舌質紅。	滋陰安神	天王補心丹
心脾両虚	心血虚と脾気虚の症候（食欲不振・泥排便・易疲労・息ぎれ）が同時にみられる。時に出血傾向がある。	気血双補	帰脾湯 人參養榮湯
心腎陰虚	心陰虚の症状以外に、腎陰虚の症状（耳鳴り・腰や膝がだるい・夢精）などの症状がある。	滋陰安神	天王補心丹 六味地黄丸＋酸棗仁湯

弁証	主症状	治療原則	代表方剂
心火上炎（心火旺）	心経の虚火が上昇して起こり、舌がしみる・舌瘡・口内炎・心煩・不眠・多夢・焦燥感・心火が小腸に下移して排尿痛・排尿困難・尿が濃いなどを伴う・舌尖紅・脈数。	清心瀉火	三黄瀉心湯 導赤散（市販） 清心蓮子飲
心熱下注小腸	心火の症状とともに、尿意促進・排尿痛・血尿・濃縮尿などが存在する。	清心利小便	導赤散 清心蓮子飲
心腎不交	心陽と腎陰の生理関係が常態を失う病変で、腎陰不足や心火擾動で両者が協調関係を失って起こる。心火旺の症状＋腎陰虚証。舌質紅絳で乾燥・無苔・脈細数。	交通心腎 滋陰降火	天王補心丹（市販） 黄連阿膠湯（市販） 知柏地黄丸（市販） 三黄瀉心湯＋六味地黄丸
胸痹	心臓部の鈍痛や苦悶感・動悸・冷や汗・舌質暗・脈微細淡・結代。	宣通心陽 活血化瘀 辛香開竅	栝楼薤白半夏湯 柴陷湯 通竅活血湯 冠心Ⅱ号方
痰迷心竅	独り言・痴呆・行動情緒異常・意識消失・運動知覚麻痺・痰が多い・舌質胖大淡紅・舌苔白膩・脈滑。	滌痰開竅	蘇合香丸 竹茹温胆湯
痰火擾心	肝鬱化火から津液が煎灼されて痰となり、痰火が上逆して心神が擾乱して起こる。頭痛・目の充血・不眠・焦燥・狂躁状態・意識消失・瘡癰・舌質紅・舌苔黃膩・脈弦滑数。	清心瀉火・ 滌痰開竅	礞石滾痰丸 安宮牛黃丸 牛黃

神戸中医学会編著：中医入門（第2版）、医歯薬出版株式会社、2006年、165頁を元に一部改変して作成

第20回で「心の弁証」の講義があります

5. 風は肝と相応する(内風)

肝は風木の臓であり、風邪と同気相求めるため、風邪による病変は肝気偏盛を引き起こしやすく、逆に肝の病変は動風を生じやすい。

風寒・風熱・風濕などの外風はいずれも化熱(長時間同じ邪が除去されず、留まるとそこは熱を帯びてきて周囲の陰を消耗して、陽亢となり)して肝風を生じ、けいれん・後弓反張などの筋脈拘急を引き起こす。

「素問・至真要大論：諸風掉^{トウ}眩^(ふるえめまい)は、みな肝に属す」

6. 外風・内 風

外風は自然界の風邪を指し、内風は臓腑の機能失調によって発生した風邪の特性をもつ症候を指す。

内風は肝血虚・肝陰虚・肝腎陰虚など肝の陰血不足が原因で発生し、陰血不足で肝陽が抑制されず偏亢し上逆するため、めまい・ふらつきが生じ、陰血不足で筋脈を濡養できないためにひきつり・けいれんがみられる。

外風が内風を引動することもあり、外風が裏に入り化熱して陰血を消耗すると肝風内動が生じ、陰血不足状態では外風が侵入しやすく容易に肝風内動(ふるえ、けいれん、ひきつりなど)を引き起こす。

風(内風)について 桂枝加竜骨牡蠣湯について質問1

桂枝加竜骨牡蠣湯も肝(胆)に関連して使う処方でしょうか？

柴胡加竜骨牡蠣湯と名前は似ていますが、数冊の本で処方解説を読むと、異なるグループのようです。柴胡加竜骨牡蠣湯はよく使いますが、桂枝加竜骨牡蠣湯はイメージがつかめていないため、ほとんど使っていません。

答 森雄材先生の「図説漢方処方の構成と適用」(医歯薬出版)の説明

安神・補虚→虚弱者の肝陽化風(怒りなどのストレス→肝陰虚肝陽上亢→頭がくらくら・頭痛・顔面赤い・耳鳴などの神経症状{上衝}が出現。これらは肝風・内風と言われる)が起こる場合に適用となる。

安神の龍骨・牡蠣・大棗を主体とし、不安・驚きやすい・浅眠・多夢・動悸・夢精などに有効。

元来は「男子失精、女子夢交」で夢を見て精液を漏らしたり、夢で性交する場合に用いられる。病態は元気が衰え脳の興奮性が高まり、軽微な刺激で性の興奮が生じた状態。

一般には上記神経症状があり、体力低下して冷えがみられる状態に用いる。桂枝湯の加方で、小建中湯の方意が基礎にある。(柴胡加竜骨牡蛎湯の虚証版と考えるとわかりいいかもしれません。虚証だから気陰両虚になり陰虚陽亢による神経症状が出現します)

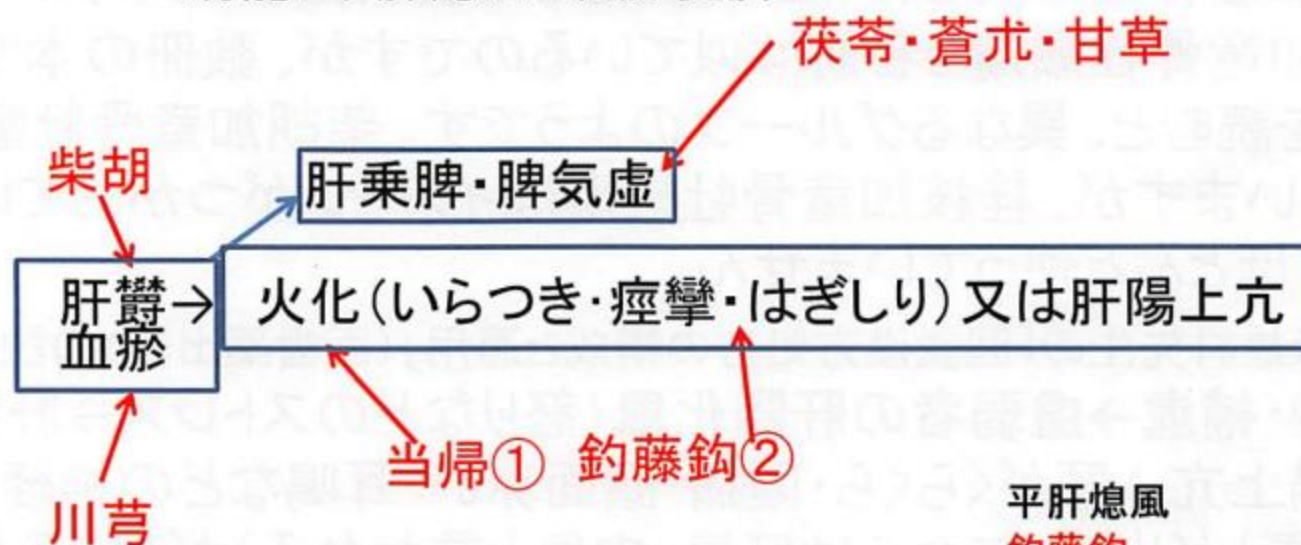
質問2

抑肝散加陳皮半夏は、抑肝散では胃の具合が悪くなる人や胃の弱い人に使うとよい、という意見と、これらはまったく違う処方だという意見を聞きますが、どうなのでしょう？

答

抑肝散は熄風(肝風・内風の治療:釣藤鉤)、疏肝(柴胡・川芎)・柔肝(肝陰虚の治療法で養血柔肝ともいう:四物湯:当帰他)、補気健脾補血(白朮・茯苓・甘草)し、釣藤鉤は熄風・止痙の効果があるのでひきつけ・ふらつき・手足舌のふるえなどを改善、柴胡・川芎で疏肝解鬱で精神を安定させ、イライラ・緊張・うつ状態を改善する。

抑肝散 主治：肝鬱化風の痙攣、歯ぎしり、イライラ、不眠
 効能：平肝熄風・疏肝健脾



①補血柔肝 ②熄風潜陽・平肝清熱

平肝熄風
 釣藤鈎
 疏肝
 柴胡
 健脾
 茯苓
 蒼朮
 甘草
 補血
 当帰
 川芎(活血)

逍遙散に似ているがのぼせ・ほてりなどの熱に対するものが無いので要注意である。

以上、小児の引きつけ・夜泣き・チック・一般的イライラ・緊張・舌のふるえ・はぎしりなどに有効。

柴胡・川芎で疏肝解鬱で精神を安定させ、イライラ・緊張・うつ状態を改善する。茯苓・蒼朮・甘草は健脾利水に作用し脾虚に良い。当歸・川芎で補血活血作用がある(川芎の疏肝は、荒櫛で毛を解きすかす感じ)。

抑肝散加陳皮・半夏では、陳皮・半夏に、蠕動運動調整・制吐作用があるので、肝旺乗脾(木乗土)による悪心・嘔吐・腹満などの胃腸症状がある時に使用する。

質問3

私はこの2ヶ月弱、啓脾湯で胃の調子がだいぶよいと感じています。が、全身を総合的に見ると、もうちょっと元気でいたいです。毎回、自分の体調を中心に講義を拝聴していますが、今日はわかをはめられた感じ＝胸脇苦満"にびっくりしました。

実は時々、いつものブラが苦しくてしんどい時

があるのです(1日くらいでおさまったり、3-4日続いたり)。

喘息を持っているので、その症状としてごくわずかだが息苦しくなっているためにブラで締め付けられるのが辛くなるのかな？

と、推測していたのですが、これまでの講義の中で“肺”や喘息に関連する箇所ではあまりピン、ときませんでした。

今日は、もしかするとこっち(胸脇苦満)かも知れないと思いました。しかし、ストレスの自覚はないので、もう少し勉強して、合いそうな処方があるかどうかさがしてみようと思います(慣れたストレスは自覚がないが、実はストレス。胸脇苦満おこる可能性あり。

土方先生のコメント

答

啓脾湯で調子良くなっても、もし(以前服用していた)補中益気湯を中止したら、升提作用がなくなり、内臓下垂傾向がでたり又、補中益気湯には、半夏が入ってないから、胃もたれ傾向が出たりなどありえます。

啓脾湯で補脾陰できても、補脾陽をできないとか、今まで効いていた薬は全部やめないで、たとえ1つでも服用しておいた方が良いでしょう。

もし、心気虚(無力脈・不整脈)があれば、炙甘草湯を1包/日併用するとか、生来虚弱傾向のある人は、複数臓器の治療をすると、五行五臓の多くに作用し、単方よりはるかに有効です。

胸脇苦満の話はありえますね。

肝鬱が高じると、木乗土で胃腸障害、木火刑金(肝火犯肺)で肺症状が出現します。

又元々脾虚の人は、肝旺乗脾が起こりやすく、ちょっとしたストレスで胸脇苦満悪化に寄与します。

小建中湯証の人は恐らくストレスがなくても、生来の脾虚により、肝旺症状の腹痛、腹鳴、下痢などがあるのではないのでしょうか？私も嫌なことがあると、思わずため息がでますが、深呼吸でおちつかせるでしょう。

これは肝鬱が進行しないように、肺が相克しているのでしょう。

何もしていないでいると、むかつき吐き気も出ることがあります。

そんな時当然胸脇苦満の増長はあると思いますが。

答は神のみぞ知るです。

(土方)

今まで効いていた方剤は少量で残す

心気虚があるなら
炙甘草湯少量追加など
複数の臓の治療をすると有効

肝鬱からの
木乗土
肝火犯肺

生来脾虚
→木乗土起こしやすい
(無意識に)肺で相克

質問3は、私の一番の問題が、補中益気湯にアレルギーになってしまったことから出ています。

急性肝炎をおこしたあと、1年後位に再服用したら、やはり肝機能が悪化して、その後はもう服用していません。

(おそらく黄ぎが原因です)。

この後、子宮癌検診を定期的に行っていた神戸の川口恵子先生を受診したときに、冷え・クーラー病・胃弱にお勧めを聞いてみたら、「真武湯はどう？」と、おっしゃいました。

『中医処方解説』で真武湯を読むと、土方先生のおっしゃる補脾陽という意味もあるかなと思ったので、真武湯(附子・芍薬・茯苓・朮・乾生姜)を併用しはじめたところ、今年の梅雨の多湿と夏の暑さを乗り越えられたようです。冷やしたビールを飲みすぎない、食べ過ぎないことが身についたことあるのですが、この夏は胃が元気をなくして食べられなくなることがほとんどなかったです。たまに不整脈が頻発するとき炙甘草湯を併用していましたが、真武湯を併用し始めてからは炙甘草湯は飲まずにすんでおり、この組み合わせは私に合っているようです。

(啓脾湯 + 真武湯で梅雨～夏の胃腸不良を防げた、炙甘草湯不要になった)

考察

この方は、胃腸は弱い方でした。

特別熱い物が好きとか、冷えたら下痢をするなどの症状は無かったのですが、実は温脾することにより脾機能が改善したということです。

つまり、脾陽虚の体質だったわけです。脾陽虚は当然脾気虚でもありますから、温脾され、補脾気されたわけです。脾が改善すると、心脾相生の関係で、心も元気になり、動悸が減るのも納得です。逆にこの方の動悸は、脾陽気虚から相生ルートを通じて心気虚を引き起こして動悸してたわけです。

此の意味で、自分の弱い臓を元気づけることは、相生関係で、両横の臓を元気にしますから、とても意義のある治療です。

おそらく、この方は脾の母である「心」と、子である「肺」が元気になり、胸腹の輪っかが胸脇苦満と仮定すると、脾を丈夫にすることにより、肝旺乗脾の肝の相乗力が減少し、肝が安定して輪っかの感じも減少するでしょう。

分析するとともに脾陽虚の体質

温脾→補脾気→心脾相生で心気虚改善（→おそらく肝乗脾も軽減するだろう）

脾気虚で心症状が出現(子盗母気)4症例

山崎武俊 音羽病院心臓内科：第65回日本東洋医学会学術総会講演要旨 p 243

0-111 (著者の許可を得て要旨全文転載)

動悸を主訴として心臓内科外来を受診した患者は多いが、胸苦しさや息切れも含めて「動悸」として訴えることが多く、特に虚証患者では西洋医学的異常所見が乏しく治療に難渋する例が多い。今回、我々は虚証の動悸に対して小建中湯が有効であった4症例を経験したので報告する。

症例1:67才女性。安静労作に関係の動悸及び下痢を主訴に来院。心機能は良好で上室性期外収縮を認めるのみで、両側腹直筋攣急、弦虚脈に対し小建中湯10g/日で速やかに動悸・下痢とも消失した。

症例2:83才女性。家事中の動悸を主訴に来院。

心機能良好で、心室性期外収縮の散発を認めるのみであった。
舌侯：淡白紅、薄白苔。脈候：弦虚。腹侯：腹直筋攣急、

臍上悸を認めた。小建中湯10gを処方。動悸は軽減した。
 症例3:34才男性。動作開始時の動悸を主訴に来院。胃腸が弱い。心電図、心エコー:異常なし。舌候:淡白紅、薄白。
 腹腔:腹直筋攣急を認めた。脈が弦虚以外舌候問題なし。
 腹直筋攣急を認めた。

小建中湯10gを処方。動悸は、胃腸の状態も良くなった。
 考察:小建中湯は虚証の疲労倦怠感、腹痛などを目標に用いられるが、「傷寒論」で、「傷寒二、三日、心中悸して煩する者は、小建中湯これを主る。」とあり、動悸に対する効果も記載されている。

本書著者考察:五行理論による、当に子(脾)盗母(心)気を示している。つまり、虚している脾が親の心の気を盗んだ結果、動悸が出現したものと考えられる。

中医臨床のための方剤学^{文献}によると、上記、「傷寒・・・心中悸・・・」太陽病で2, 3しかたっていないのに、動悸・心煩が生じるのは、外邪入裏とは考えられず、中気虚弱の症候である。

心悸は陽の不足、心煩は陰の不足で生じるので、小建中湯で中焦生化の源を振奮し、陰陽を補い営衛を調和させる。

又、金匱要略^{文献}には「虚勞裏急し、悸し衄し、腹中痛み、夢に失精し、四肢は痠疼」は陽気の不足を、悸（動悸）・衄（鼻出血）、夢失精・手足煩熱・咽乾口燥は陰液の不足を示し、小建中湯で陰陽気血の化源を補充する。

小建中湯自体の補脾作用により効率的に補脾され、肝旺乗脾を抑制し、さらに子（脾）が母の気（心気）を盗まなくなった結果、心気虚が著減又は消失して動悸が消失したと考えられる。

さんつう

文献：虚勞裏急，悸，衄，腹中痛，夢失精，四肢痠痛，手足煩熱，咽乾口燥，**小建中湯**主之。

2) 寒邪

寒邪による発病の特徴と症候は、自然界の寒冷・結氷・凝固などの現象に類似しており、以下のようなものを言う。

- ①全身あるいは局所に寒冷性の症候がみられる。

寒がる（怕冷）・温暖を好む（喜熱）・四肢の冷え・下腹部が冷えて痛む

- ②排泄物が稀薄で透明である。

うすい鼻水・うすい痰・水様物の嘔吐・希釈尿・水様便（素問・至真要大論）「諸病の水液、澄^澈てつ清冷なるは、みな寒に属す」

- ③気滞血瘀を引き起こして、強い疼痛を生じ易い。

「寒勝ればすなわち痛む」

- ④経絡に侵入すると筋肉のひきつり（筋脈拘攣）・収縮が生じる。

「寒は収引を主る」といわれる。

上記症候が見られたときは、寒邪による病変とみなすことが出来る。

凍傷・納涼・冷飲食など外来因子による病変は「外寒」であるが、より多い原因は（例えば老化による）人体の陽気が衰弱して温煦作用が不足し、「寒は中より生ず」となった内寒である。外寒と内寒は相互関連・影響がある。例えば陽虚の人は外寒を感受しやすく、外来の寒邪は陽気を傷害して内寒を産生する傾向が強い（冷えると下利する人）。

2) 寒邪

寒邪による発病の特徴と症候は、自然界の寒冷・結氷・凝固などの現象に類似しており、以下のようなものを言う。

①全身あるいは局所に寒冷性の症候がみられる。

寒がる(怕冷)・温暖を好む(喜熱)・四肢の冷え・下腹部が冷痛

②排泄物が稀薄で透明。うすい鼻水・うすい痰・水様物の嘔吐・希釈尿・水様便〈素問・至真要大論〉「諸病の水液、澄て清冷なるは、みな寒に属す」

③気滞血瘀を引き起こして、強い疼痛を生じ易い。

「寒勝ればすなわち痛む」

④経絡に侵入すると筋肉のひきつり(筋脈拘攣)・収縮が生じる→「寒は収引を主る」といわれる。

凍傷・納涼・冷飲食など外来因子による病変は「外寒」であるが、多い原因は人体の陽気が衰弱して温煦作用が不足し、「寒は中より生ず」の内寒で両者は相互影響。陽虚の人は外寒を感受しやすく、外寒邪は陽気を傷害し内寒を産生。



寒邪についての補足

寒は陰邪で、陽気を傷りやすい：霊枢・始終「陰盛んなれば則ち陽虚す」。素問・調經論「陰盛んなれば則ち内冷ゆ」。

寒邪が肌表を侵襲すると、衛気が鬱あつして皮毛が温煦されず、先ず悪寒、次は邪正相争による発熱が生じる。

寒性は収引する：気機を収斂、経脈を拘急させ、疼痛や筋肉のひきつりを生じる。

寒性は凝滯する：疼痛（温で軽減）。 渋又は遅脈。

寒は腎と相応する：寒は冬の主気で、腎は寒水の臓。

寒邪は腎の陽気を損傷し易く、蒸騰気化を衰弱させる為水湿が停蓄（腎虚水沍）。

外寒内寒：外寒が浸入、長期停積、臓腑の陽気が損耗し内寒が生じる（寒冷地に、暖房なしで長期滞在→腹痛・下痢の発症→諸々の障害発生）。

直接臓器に浸入（極寒の環境に突然捨て置かれる）
→寒邪直中。

【参考資料】

初心者用中医学参考書

中医診断学ノート:内山恵子 東洋学術出版

中医学ってなんだろう:小金井 信宏

やさしい中医学入門:関口善太 東洋学術出版

医学生のための漢方医学:安井廣みち 東洋学術出版

いかに弁証論治するか「漢方エキス製剤の運用」:菅沼伸・菅沼栄 東洋学術出版

いかに弁証論治するか:菅沼伸・菅沼栄 続編 東洋学術出版

●改訂中医学基礎:上海中医学院編・神戸中医学研究会訳 燎原

中医学入門(第2版):神戸中医学研究会 医歯薬出版

中医臨床のための舌診と脈診:神戸中医学研究会 編著 医歯薬出版

初心者には少し難しい? しかし早晚必要

* 漢方・中医学臨床マニュアル:森雄材 医歯薬出版

●「詳解」中医基礎理論:劉燕池他。浅川要監訳 東洋学術出版

用語解説として確認に便利

* 漢方方剤ハンドブック:菅沼伸・菅沼栄 ?

* 症状による中医診断と治療:神戸中医学研究会 燎原

辞書類

中医基本用語辞典 高金亮 監修 劉桂平他 東洋学術出版

中国漢方医語辞典 成都中医学院・中医研究院・広東中医学院 中国漢方出版

その他多数あるが、初心用のみ幾つか選びました。

更なる選択については御相談下さい。

【2022年現在絶版・入手困難のもの】

中医学基礎

症状による中医診断と治療

症例 9才 女児

2月の寒い日小学校の校庭で、体育の授業を受けていた。風が寒く身にしみたという。生来虚弱(SFD:出生児体重:2300g。祖母が厳しく口うるさいということも影響?→肝鬱)で幼稚園は殆ど休んだ。小学校に行きだして、1~2ヶ月に2,3日休む程度となった。帰宅後、顔つきがおかしいことに祖母が気づき、あわてて行きつけの小児科につれていったところ、顔面麻痺と言われた。治療は、入浴と、その間の顔面マッサージのみで、1ヶ月後略治となった。

解析

風寒邪が外邪として襲う。寒邪が経絡に侵入すると筋肉のひきつり(筋脈拘攣)・収縮が生じる→「寒は収引を主る」といわれる。局所の寒冷・筋脈拘攣とともに、常在水痘ウイルスの活性化→顔面麻痺

3) 火邪（熱邪）

火邪の特徴は「熱」であり、「熱邪」ともいう。以下のような症候がみられる。

①全身或いは局所に明白な熱性症状がみられる。

高熱・温熱を嫌う（怕熱）・寒涼を好む（喜冷）・顔面紅潮・目の充血（目赤）・尿が濃い（尿赤）・舌質紅・黄舌苔・数脈。

②排泄物が粘稠で、排出時に灼熱感をともない、病勢が急激である。

粘稠な鼻汁・黄色濃厚痰・酸味の強い嘔吐・混濁尿・膿血便、急性悪臭ある肛門の灼熱感を伴う下利。〈素問・至真要大論〉「水液の混濁は、皆熱に属す」
「諸嘔吐酸、暴注下迫（突発性下利）はみな熱に属す」

③津液を消耗しやすい。

舌乾燥・口渇し冷飲を欲する・便硬・便秘など。

④脈絡を灼傷し、迫血妄行して、出血や皮下出血・発疹を発生しやすい。

⑤神明を攪乱して、意識障害・狂躁状態などを生じ易い。

〈素問・至真要大論〉「諸熱瞤瘛ぼうけい（意識朦朧して手足痙攣状態）は、みな火に属す」「諸躁狂越は、みな火に属す」

火邪には「実火」と「虚火」がある。

上述の症候は、大方が外来の温熱邪を直接感受したり、風・寒・湿・燥の邪を感受した後に火（熱）に変化した時にみられるので、外感熱病の熱盛期に相当し、「実火」が主体である。

「虚火」は、陰虚による内熱で生じ、火熱の症状が実火よりも緩和で、身体の熱感・焦燥感（心煩）・舌質光紅で乾燥などを呈し、一般に高熱は出ず、口渇も強くなく、数脈無力である。

又、外感熱病の症候を「外火」であり、体内の陰陽失調で生じる「五志過極」すなわち精神情緒の激しい変動による熱象を「内火」といい、虚火も「内火」の一種である。一般に外火は実火であり、内火は実火と虚火の別がある。

PP31の下方に続く
(熱毒の例)

3) 火邪(熱邪)

火邪の特徴は「熱」であり、「熱邪」ともいう。

以下のような症候がみられる。

① 全身或いは局所に明白な熱性症状がみられる。

高熱・温熱を嫌う(怕熱)・寒涼を好む(喜冷)・顔面紅潮・目の充血(目赤)・尿が濃い(尿赤)・舌質紅・黄舌苔・数脈。

② 排泄物が粘稠で、排出時に灼熱感をともない、病勢が急激である：粘稠な鼻汁・黄色濃厚痰・酸味の強い嘔吐・混濁尿・膿血便、急性悪臭ある肛門の灼熱感を伴う下利。

〈素問・至真要大論〉「水液の混濁は、皆熱に属す」「諸嘔吐酸、暴注下迫(突発性下利)はみな熱に属す」

③ 津液を消耗しやすい。

舌乾燥・口渇し冷飲を欲する・便硬・便秘など。

④ 脈絡を灼傷し、迫血妄行して、出血や皮下出血・発疹を発生しやすい。

⑤神明を攪乱して、意識障害・狂躁状態などを生じ易い。

〈素問・至真要大論〉「諸熱瞽瘵ぼうけい(意識朦朧して手足痙攣状態)は、みな火に属す」「諸躁狂越は、みな火に属す」
火邪には「実火」と「虚火」がある。

上述の症候は、大方が外来の温熱邪を直接感受したり、風・寒・湿・燥の邪を感受した後に火(熱)に変化した時にみられるので、外感熱病の熱盛期に相当し、「実火」が主体である。

「虚火」は、陰虚による内熱で生じ、火熱の症状が実火よりも緩和で、身体の熱感・焦燥感(心煩)・舌質光紅で乾燥などを呈し、一般に高熱は出ず、口渇も強くなく、数脈無力である。

又、外感熱病の症候は「外火」であり、体内の陰陽失調で生じる「五志過極」：すなわち、精神情緒の激しい変動による熱象を「内火」といい、虚火も「内火」の一種である。

一般に外火は実火であり、内火は実火と虚火の別がある。

皮膚の化膿症(熱毒)・炎症は熱邪病変で治法は清熱瀉火・解毒
である→五味消毒飲(金銀花・菊花・蒲公英・紫花地丁・天葵子)・黄連解毒湯

津液の病理的変化

津液の軽度消耗を傷津、重度消耗を脱液

腎の気化機能低下で水液上部に溢れて痰となり、心・肺を侵犯

→心不全・肺水腫→動悸・呼吸促迫し咳嗽・多量泡沫状痰

→「水飲凌心」「水飲射肺」

肺・脾・腎は以下に示すように相互に影響し合う。

①脾の運化失調で津液輸送不可→停滞津液が肺気通調水道に影響して呼吸困難・咳嗽・喀痰が発生のみならず、腎の津液蒸化に影響→下肢浮腫・尿量減少が発生

脾の津液輸布に影響して湿・痰が生じる

②肺の宣散・肅降失調→失通調水道

腎の気化機能失調させ水液が上部にあふれる

脾の運化に影響→水腫・腹満

③腎陽衰微→水液蒸化不可

肺気宣散肅降に影響→
呼吸困難・咳嗽・多痰

脾肺腎は津液停滞に
三つ巴に関連

別紙テキストにうつる

4) 湿邪

湿邪による症候は、自然界の潮湿の気候や水湿の停滞・貯留の現象に類似している。発病には季節性があり湿度の高い時期によくみられるが、湿地での逗留・潮湿の環境での居住・水中作業・汗に濡れた着衣などによって季節と無関係に発病することも多い。

①性質が粘膩で除去し難い。疾病の経過が長く、速やかな治癒が困難である。

②停滞性である。

体表部を侵すと身体がだるい・四肢が重だるい・頭冒感（頭重如裹^か）などの症状が、経絡や関節を侵すと固定性の関節痛・動かしにくさがある。

③脾胃を犯しやすい。

食欲不振・消化不良・胸苦しい・悪心・腹満・泥状～水様便・尿量減少・厚膩苔・濡緩脈が生じ易い。

④全身或いは局所に水湿の貯留・停滞がみられる。

水腫・脚気・白色帯下・湿疹など。瘡傷で浸出液（流脂水）が多いのも含まれる。

湿には「外湿」と「内湿」がある。「外湿」は外来の湿邪によって生じた病理変化であり、「内湿」は脾虚で津液運化が出来なくなっていて体内に産生された水湿である。外湿と内湿は関連しもあり、脾虚では内湿が生じると共に外湿を感受し易く、外湿が侵入すると脾を障害して内湿を産生しやすい。

因于湿，首如裹
(生氣通天論)

4) 湿邪

湿邪による症候は、自然界の潮湿の気候や水湿の停滞・貯留の現象に類似。湿度の高い時期に発病するが、例えば、湿地での逗留・潮湿の環境での居住・水中作業・汗に濡れた着衣などにより、季節と無関係に発病することもある。

特徴

- ① 性質が粘膩(べったり粘着)で除去しにくい。疾病経過が長く、速やかな治癒が難しい。
- ② 停滞性である。体表部を犯すと体がだるい・四肢重だるい・頭冒感。経絡や関節を犯すと固定性の関節痛・動かしにくい。
- ③ 脾胃を犯しやすい。食欲不振・消化不良・胸苦しい・悪心・腹満・泥状～水様便・尿量減少・舌苔厚・濡緩脈
- ④ 全身・局所に水湿貯留・停滞症状。水腫・脚気・白色帯下・湿疹。
~~凍傷~~の浸出液(流脂水)多量。

瘡傷

外湿: 外来の湿邪。内湿: 脾虚で津液不運化の為体内貯留
脾虚では外湿を受けやすい。外湿侵入脾を障害→内湿産生



湿邪の補足

阻遏

湿は陰邪で、気機を阻あつし、陽気を損傷し易い。

: 胸苦しさ・頭重感を生じる。胃気不降で悪心・嘔吐・腹満・下痢（脾陽困阻・運化不足）。

湿性は重濁・粘膩: 頭重・身体四肢の重だるさ・関節水腫・大小便快く出ないなど渋滞症状長期化。

湿性は下向する: 湿邪は重濁で下に向う趨性がある。

下肢水腫や帯下・泄瀉・淋濁（下部に有症状）

湿は脾と相応: 湿は土気（霜と土）, 脾は湿土で同気相求。

湿邪は脾陽を困阻・運化失調させる。脾の運化低下で水湿内生（泄瀉・水腫）（栄養失調の浮腫）。

外湿と内湿: 長雨など外湿が内部に浸入→脾陽困阻→内湿。

内湿強いと同気相求め外湿易浸入（リウマチの人がハワイに行くと、治癒することがある）

5) 暑邪

これによる発病は季節性がある。病態には2種ある。

ひとつは暑熱の環境下生じる日射病・熱射病などの「中暑」であり、もうひとつは暑い時期にみられる外感病で習慣的に「暑病」と言われるものである。以降は次スライドで説明

暑い気候には2つの特徴があり、「暑熱」と「暑湿」である。

①暑熱

熱証が強い。高熱・口渇・胸があつくるしい（心煩）・無汗あるいは大汗・脈は洪大

が主症状である。高熱のために津液を消耗するので、無力感（乏力）・呼吸促迫・息切れ・乾燥苔なども見られる。

②暑湿

熱中挟湿である。起伏する発熱・重だるい四肢・食欲不振・胸苦しい・悪心・嘔吐・泥状便・尿が濃く少量（小便短赤）・濡脈・厚膩苔などが主症状である。

5) 暑邪

発病には季節性がある。病態には2種ある。

- i 暑熱の環境によって生じる日射病・熱射病の「中暑」
- ii 暑い季節の外感病で習慣的に「暑病」と呼ぶ(日本脳炎の「暑湿」も含まれる)。

暑い気候には二つの特徴、炎熱・潮湿がある。従って暑邪による病変には「暑熱」と「暑湿」の二種症候が見られる。

暑熱は熱証が強く、暑湿は熱中挟湿である。

- ① 暑熱: 高熱・口渇・胸があつ苦しい(心煩)・無汗あるいは大汗・洪大脈が主症状である。高熱の為に気と津を消耗するので、無力感(乏力)・呼吸促迫・息切れ・舌苔の乾燥
- ② 暑湿: 起伏する発熱・四肢が重怠い・食欲不振・胸苦しい・悪心・嘔吐・泥状便・尿が濃く少量(小便短赤)・濡脈・厚膩苔などが主症状。

熱中挟湿

暑い時期の上記症状は、暑邪による疾病と見なして良い。



PP35の方を参照してください

6) 燥邪

症候は自然界の乾燥現象に類似している。

①気候が乾燥した季節や地域において発病する。

②乾燥症状が見られる。

鼻孔の乾燥や鼻出血・口の乾燥・くちびるの乾燥やひれつ・咽喉が乾燥し痒み又は痛みがある・乾咳・少痰または無痰・皮膚が乾燥・舌の乾燥。

外来の燥邪による発病を「外燥」と称する。一方体内の津液・陰血消耗のため出現した燥象が「内燥」であるが、邪によって生じるものではなく、「津血不足」が原因であるので、「傷津」「傷陰」（脱液）「津枯血燥」などと呼ぶことが多い。



6) 燥邪

燥邪による発病の特徴と症候は、自然界の乾燥の現象に似ている。

① 気候が乾燥した季節や地域において発病する。

② 乾燥症状が見られる。

燥は肺と相応する：燥は秋金の主気であり、肺は金。

邪は先ず肺経を犯すために、津液が損傷して鼻・咽・皮膚の乾燥が見られ鼻孔の乾燥や鼻出血・口の乾燥・口唇の乾燥や
皸裂・乾咳・少痰又は無痰

くんれつ

外来の燥邪による発病を「外燥」と称する。

一方、体内の津液・陰血が消耗したために出現する燥証が「内燥」であるが、邪によって生じるのではなく「陰血不足」が原因であるので、「傷津」「傷陰（脱液）」「津枯血燥」などと呼ぶことが多い。

津血不足

火邪と暑邪の補足 燔灼

火・暑は陽邪で、その性のはん灼・上炎する：「陽勝れば則ち熱す」火性は炎上するので、上部を犯して目の充血、腫脹疼痛・口舌びらん・頭痛・めまいがみられる。心神を上擾すると、焦燥・不眠・狂躁・意識障害が生じる。

火・暑は傷津耗気し易い：火・暑は陽熱邪で開泄する。

腠理ゆるめ発汗させ、気も共に外泄する（発汗なくても灼傷されて減少→傷陰）。火は夏季前半の主気で熱邪主体。

暑は夏季後半で、雨水多くなり湿邪を兼ねるようになる。

「暑は多く湿を挟む」。火は風・寒・湿邪から転化したり、臓腑や情志の機能失調（肝鬱）から内生（化火）。

火は生風・動血し易い：火邪は津液を灼消、陰血耗傷→筋脈滋潤不可→肝風内動。火邪は血流加速→迫血妄行→出血（吐血・血尿・発斑）。

火は瘡瘍を発し易い：火邪血分に鬱滞→気血阻滞→肉腐成膿「諸痛痒瘡は、みな心（血分有熱）に属す」

六淫の兼挟と転化

臨床上は単一病邪による外感病は少なくて兼挟が多く、外感病の病変の経過においてはある病邪が別の病邪(湿邪が化熱→湿熱(化膿症))に転化することがある。

病邪の兼挟:「風は百病の長たり」で寒・湿・燥・火邪は風邪を兼挟して人体を侵襲することが多い。

風と各病邪による病変の特徴を備えている。

その他、寒湿や湿熱が病変を引き起こす。

病邪の転化:風・寒・暑・湿・燥邪は気機を鬱滞させたり、正気と相争するなかで時に火邪に転化して熱証を生じる。

これを「五氣化火」という。この火は内生したもので病機が転化したことを示す。又、熱邪は傷陰して内燥を生じ、寒邪は気機凝滞させて内湿を生じる。

これらは病機が転化して生じた病理産物である。故に、臨床では六淫による病変の特徴だけでなく、病邪兼挟・病機転化に注意する。

2. 内傷七情

七情とは、精神・情緒的な活動を意味し、「喜・怒・憂・思・悲・恐・驚」の七情を指す。一般的には生理的変動の範囲内にあるので病的状態にはならない。しかし、長期的に精神的ストレスを受けたり、突然強い精神的衝撃があると、生理的調節範囲を超えてしまい、体内の陰陽・気血・臓腑機能などが失調し、疾病が発生する。体内の機能失調によって発生する疾病なので「内傷」という。

心神の内傷では、驚いて動悸がする（驚悸）・持続性の動悸（怔忡）・健忘・不眠などの症候、恍惚状態・悲しんでよく泣く（悲憂善哭）・あくびが多い（時時欠伸）という症候の臓躁症（ヒステリーの一種）、あるいは心火暴盛による躁状態・精神錯乱等を呈する癲狂証などが生じる（甘麦大棗湯）。

肝気鬱結では、抑鬱感・易怒・脇痛・噯気・咽の梗塞感などの症候、女性では乳房のしこり・下腹部のはった痛み・月経不順などが見られる。

心脾の損傷では、心神の内傷による症状とともに、脾胃の運化と統血の機能低下による腹痛・悪心・腹鳴・水様便・胸や腹が痞えて苦しい・食欲不振・無月経・不正性器出血（崩漏）などが生じる。

内傷七情による疾病に対しては、精神的素因との関連を正確に認識する必要がある。一面では精神的要因を解決する努力をすると同時に、もう一面で患者の陰陽・気血・臓腑などの失調の状況を全体的に分析し、適切な治療を行うべきである。このようにして、「鬱によりて病を致す」「病によりて鬱を致す」という悪循環を断ち切り、根本的な治療が可能になるのである。

2. 内傷七情

七情とは、精神・情緒的な活動を意味し、「喜・怒・憂・思・悲・恐・驚」の七情を指す。

一般的には生理的変動の範囲内にあるので病的状態にはならない。しかし、長期的に精神的ストレスを受けたり、突然強い精神的衝撃があると、生理的調節範囲を超えてしまい、体内の陰陽・気血・臓腑機能などが失調し、疾病が発生する。

体内の機能失調によって発生する疾病なので「内傷」という。

心神の内傷では、驚いて動悸がする(驚悸)・持続性の動悸(怔忡)・健忘・不眠などの症候、恍惚状態・悲しんでよく泣く(悲憂善哭)・あくびが多い(時時欠伸)という症候の臓躁症(ヒステリー的一种)、あるいは心火暴盛による躁状態・精神錯乱等を呈する癲狂証などが生じる(甘麦大棗湯)。

肝気鬱結では、抑鬱感・易怒・脇痛・噯気・咽の梗塞感などの症候、女性では乳房のしこり・下腹部のはった痛み・月経不順などが見られる。



心脾の損傷では、心神の内傷による症状とともに、脾胃の運化と統血の機能低下による腹痛・悪心・腹鳴・水様便・胸や腹が痞えて苦しい・食欲不振・無月経・不正性器出血(崩漏)などが生じる。

内傷七情による疾病に対しては、精神的素因との関連を正確に認識する必要がある。

一面では精神的要因を解決する努力をすると同時に、もう一面で患者の陰陽・気血・臓腑などの失調の状況を全体的に分析し、適切な治療を行うべきである。

このようにして、「鬱によりて病を致す」「病によりて鬱を致す」という悪循環を断ち切り、根本的な治療が可能になるのである。



3. 飲食失調

主に3つの状況がある。

- ①生もの・冷物・不潔なものなどの飲食。
- ②暴飲暴食・脂っこい物・甘い物の過食
- ③飲酒癖あるいは香辛料などの嗜好

飲食失調は直接脾胃を損傷して消化機能を傷害し、食積・胃痛・泄瀉などの病症をひき起こすほか、熱・痰・湿などを発生して臓腑の病変を引き起こす重要な原因となる。他に、外感六淫と合併して疾病を発生することも多い。

4. 房室と勞倦による損傷

房室損傷は、性生活の不節制・早婚・出産過多などを含む。この状況は腎精を消耗させるので、虚弱体質になって疾病にかかりやすくなり、腰が怠い・遺精・元気が無い（神疲）・無力感・めまいなどの腎虚の症候が発生する。女性の出産過多では、衝脈・任脈を損傷して月経不順・無月経（経閉）・帯下などが生じる。

勞倦損傷は過労を意味する。勞倦は脾を傷害して、疲労感・無力感・倦怠感・顔色が萎黄・羸（るい）瘦などの気血虚弱の症候を生じる。

3. 飲食失調

主に3つの状況がある。

- ①生もの・冷物・不潔なものなどの飲食。
- ②暴飲暴食・脂っこい物・甘い物の過食
- ③飲酒癖あるいは香辛料などの嗜好

飲食失調は直接脾胃を損傷して消化機能を傷害し、食積・胃痛・泄瀉などの病症をひき起こすほか、熱・痰・湿などを発生して臓腑の病変を引き起こす重要な原因となる。

他に、外感六淫と合併して疾病を発生することも多い。



4. 房室と勞倦による損傷

房室損傷は、性生活の不節制・早婚・出産過多などを含む。
この情況は腎精を消耗させるので、虚弱体質になって疾病にかかりやすくなり、腰が怠い・遺精・元気が無い(神疲)・無力感・めまいなどの腎虚の症候が発生する。

女性の出産過多では、衝脈・任脈を損傷して月経不順・無月経(経閉)・帯下などが生じる。

勞倦損傷は過労を意味する。

勞倦は脾を傷害して、疲労感・無力感・倦怠感・顔色が萎黄・羸(るい)瘦などの気血虚弱の症候を生じる。



5. 外傷・寄生虫

1) 外傷

打撲・捻挫・創傷・火傷・毒蛇の咬傷など

外傷では主に皮肉・筋骨・気血に損傷が生じる。例えば、打撲・捻挫などでは、筋挫傷や骨折が、創傷では出血が、火傷では皮肉の灼焼や傷陰などが引き起こされる。

毒蛇咬傷は毒蛇による傷害であり、血液毒・神経毒などのよる重篤な障害が生じ、甚だしければ死亡する。民間では清熱解毒の中草薬による豊富な経験があり、有効な方薬が示されている。

2) 寄生虫

寄生虫に対しては古くから基本的な認識をもっており、住血吸虫病を「水毒」

「ちゅう脹」と称して虫病の範疇に入れ、回虫・鉤虫・蟯虫・条虫などの腸内寄生虫についてはより明確に寄生虫の体内寄生による疾病と認めており、不潔な飲食物と関係があることを知っていた。隋代・巢元方らの〈諸病源候論〉には、寸白虫（条虫）病は火を通さない牛肉を食べることにより発生すると書かれている。

この他、「湿熱生虫」という説があるが、寄生虫病では脾胃湿熱の症候がよく見られることをしめしており、湿熱が寄生虫を生じるのではない。

5. 外傷・寄生虫

1) 外傷

打撲・捻挫・創傷・火傷・毒蛇の咬傷など。

外傷では主に皮肉・筋骨・気血に損傷が生じる。

例えば、打撲・捻挫などでは、筋挫傷や骨折が、創傷では出血が、火傷では皮肉の灼焼や傷陰などが引き起こされる。

毒蛇咬傷は毒蛇による傷害であり、血液毒・神経毒などによる重篤な障害が生じ、甚だしければ死亡する。

民間では清熱解毒の中草薬による豊富な経験があり、有効な方薬が示されている。

2) 寄生虫

寄生虫に対しては古くから基本的な認識をもっており、住血吸虫病を「水毒」「ちゅう脹」と称して虫病の範疇に入れ、回虫・鉤虫・蟯虫・条虫などの腸内寄生虫についてはより明確に寄生虫の体内寄生による疾病と認めており、不潔な飲食物と関係があることを知っていた。隋代・巢元方らのく

隋代・巢元方らの〈諸病源候論〉には、寸白虫（条虫）病は火を通さない牛肉を食べることにより発生すると書かれている。

この他、「湿熱生虫」という説があるが、寄生虫病では脾胃湿熱の症候がよく見られることをしめしており、湿熱が寄生虫を生じるのではない。

6. 病理的産物

1) 痰

痰は肺・脾・腎などによる水液代謝が失調し、津液の運化と輸布が不可となり停滞したり、熱邪や鬱火で津液が囊縮されて発生した病理的産物で、喀痰だけを指すのではない。

津液の運化と輸布には脾が主要作用を行うので、「脾は生痰の源たり」という。

痰の症候は多種多様である。肺の痰証は咳嗽・呼吸困難・多痰が、胃の痰証では悪心・嘔吐が、経絡の痰証では痰核(しこり・結節)が、痰が心竅を塞ぐと精神異常・意識障害が見られる。

2) 瘀血

瘀血とは、全身的な循環不全・局所的な血流停滞・内出血などをさす。

産生された瘀血は、関連臓腑・組織・器官の脈絡の血行を阻害したり停滞させ、一連の症候を発生する。

瘀血では局所の疼痛・腫瘤・内出血を生じるだけでなく、全身的にも顔色がどす黒い・唇や舌の青紫色・舌辺の瘀斑・脈が細または澁などが見られる。

発病の機序

（発病の原理、正と邪のバランス 内外の環境と発病）

6. 病理的産物

人体における陰陽の消長・気血の生化・営衛の運行などの生理的活動は、病邪に対する防衛・抵抗の能力をもっており、「正（正気）」と称する。人体を害する因子である「邪（病邪、邪気）」は正気に対立するもので主に外感六淫や痰飲・食積（食物の停滞）・瘀血などを指す。

邪と正（気）の闘争という点で発病機序を述べると、邪は人体の正気が変化しなければ発病させることは出来ない。人体の正気が強盛であったり、邪の力が弱いときには、「正よく邪を御す」で発病に至らない。このことを、〈靈樞・百病始生篇〉では「風雨寒熱は、虚を得ざれば、邪は独りにて人を傷つくにあたわず」、〈素問・刺法論〉では「正気内に存すれば、邪は干（おか）すべからず」と述べている。これとは逆に、人体の正気が弱いか、邪が強力であるときは、「正は邪に敵せず」で発病する。このことを〈素問・評熱病論〉では、「邪のあつまるところ、その気は必ず虚す」と述べている。

以上のように、邪正闘争においては、疾病を発生する根本原因は傷害性を持つ外因ではなくて人体の内鬱状態であることが重点的に示されており、病因が作用した後の人体の陰陽・気血・経絡・臓腑などの反応性が問題である。

人体の正気による抵抗力に重点をおいた上で病因という条件を考慮した発病学説は、外因のみを一面的に強調する観点とは根本的に異なっている。

この他、人体の統一体であることにも注意しており、全身性疾患に陰陽・気血失調があるだけでなく、局所の病変が全身に影響することもある（局所の傷から高熱がでる）。また全身的な病変が局所に反映することもある（口内炎・皮膚化膿症が、全身の気虚や血虚が原因のことがある）。

「中医学基礎」では この文章をイントロダクションとして
後に邪正闘争、陰陽失調の説明が続く

6. 病理的産物

1) 痰

痰は肺・脾・腎などによる水液代謝が失調し、津液の運化と輸布が不可となり停滞したり、熱邪や鬱火で津液が囊縮されて発生した病理的産物で、喀痰だけを指すのではない。

津液の運化と輸布には脾が主要作用を行うので、「脾は生痰の源たり」という。

痰の症候は多種多様である。肺の痰証は咳嗽・呼吸困難・多痰が、胃の痰証では悪心・嘔吐が、経絡の痰証では痰核(しこり・結節)が、痰が心竅を塞ぐと精神異常・意識障害が見られる。

2) 瘀血

瘀血とは、全身的な循環不全・局所的な血流停滞・内出血などをさす。

産生された瘀血は、関連臓腑・組織・器官の脈絡の血行を阻害したり停滞させ、一連の症候を発生する。

瘀血では局所の疼痛・腫瘤・内出血を生じるだけでなく、全身的にも顔色がどす黒い・唇や舌の青紫色・舌辺の瘀斑・脈が細または澁などが見られる。

36才女性 初診：2002年5月。

現病歴：5年前にC型肝炎ウイルス抗体陽性判明。

虚弱児(気虚)であった。易疲労。生理痛(気虚→血瘀)。

偏頭痛、眼精疲労・多夢(肝血虚→心血虚)、便秘(脾虚)・

青じみが出来やすい(脾不統血)。

寒がり・手足冷える・不妊症(2年以上不妊：腎陽虚)。

現症：舌体：紅(脾虚→血虚→陰虚)、苔：白厚(脾虚生湿)、

舌下脈絡：瘀。脈：沈細滑弦(肝鬱)、重按無力(心気虚)、

76 /分。疲労感＝NRS10(気虚)

弁証：気陰両虚、陽虚、心気虚、血瘀

処方：折衝飲(松浦漢方)3g、炙甘草湯 4g、補中益気湯 6g、

附子末1g /日

折衝飲(松浦 3g)

牡丹皮1.5g 川芎1.5g 芍薬1.5g 桂皮1.5g 桃仁2.5g 当帰2.5g 延胡索1.0g 牛膝1.0g 紅花1.0g

2002年6月12日：便通が改善。何となく元気。NRS=5

処方①継続、

2002年6月30日：ほぼ全症状消失して好調。

2003年3月13日：NRS=0,服用量半量で続服。

2003年9月中旬妊娠。

考察：先天の腎陽虚に対し附子末で温腎陽し、補中益気湯の
人参・大棗・黄耆で補中益気し、柴胡・陳皮で疏肝解鬱理気、
折衝飲で活血化瘀し、炙甘草湯で補心陰陽し互いの相互併
用で相乗的に作用し、数年来の症状が1ヶ月前後で消失した
と考えられる。

腎陽虚・冷え症内：寒、脾虚→血虚→陰虚：内熱、

苔白厚(脾虚生湿)：内湿、風邪にかかりやすい：風寒

アナフィラクトイド紫斑病=HS紫斑病=IgA血管炎の2歳児

火邪症例:内熱症例:血熱の症例

症例1:2歳男児

漢方薬開始約3週間後PSLを中止したが、再発が無いため退院となった。

主訴:紫斑、腹痛、血便、関節痛

現病歴:2000年4月中旬頃から感冒症状が出現した。

4月25日に風疹の予防接種を受けた後から、点状出血が右下腿に出現し、次第に左下腿、両前腕へと 拡がっていった。

水様性下痢を伴う腹痛、血便、膝関節痛などが出現した。

紫斑が悪化したため5月11日大学病院小児科に入院となった。

精査の結果、**アナフィラクトイド紫斑病**と診断された。

シェーンラインヘノッホ
HS紫斑病
IgA血管炎

体重:11.6kg, 身長:86.5cm, 体温:36.9度、血圧:92/58。

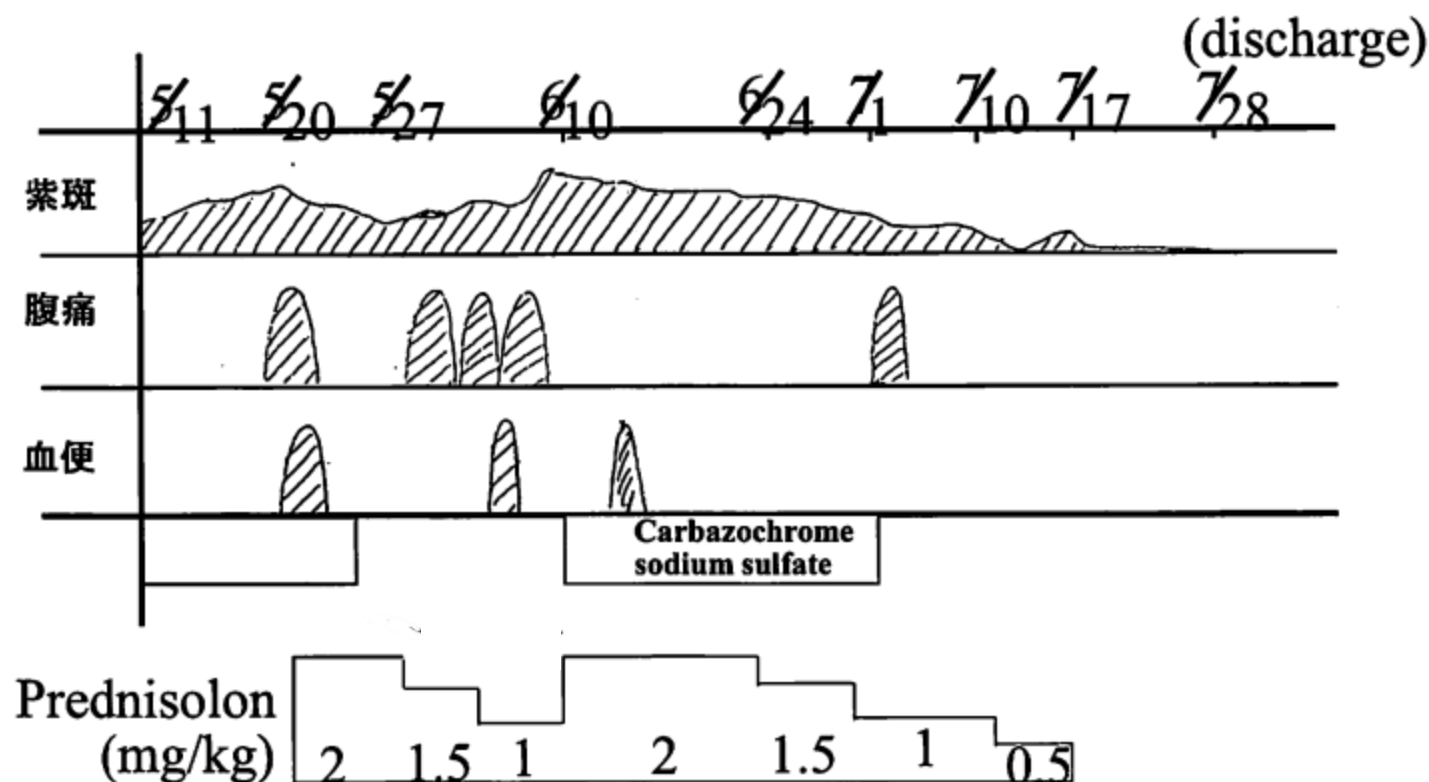
図に示す如く、止血剤(アドナ)を投与したが反応しないため、ステロイドホルモン(プレドニゾロン:PSL)を投与した。

腹痛、血便など改善していったが、PSLを減量すると症状悪化したため、漢方治療を開始した。

TCM理論より、紫斑があるので血流障害・鬱滞(血瘀)がある、頻脈で興奮しやすいことから陰虚陽亢(文献p47)がある、血管炎の存在と冷たいものを好むことから湿熱があると考えた。
血流鬱滞に対し桂枝茯苓丸、陰虚陽亢に対し三物黄芩湯を、
湿熱に対し黄連解毒湯を投与した。

処方: 1日当たり処方: 黄連解毒湯(TJ-15)(1.2g/day)、桂枝茯苓丸(EK-5)(1g/day)、三物黄芩湯(TJ-121)(0.6g/day)を投与した。
PLSを漸減していったにも拘わらず紫斑、腹痛、著減し血便は消失した

血管性紫斑病



Orengedokuto, Keishibukuryogan, Sanmotsuogonto

Fig 4. Clinical course of case 2 during hospitalization

症例:40才女性:164cm、53kg(気陰両虚→虚熱・血瘀)

初診:X年3月2日

主訴:全身倦怠感と痛み。疲れると動きがこわばる。

現病歴:全身倦怠感。座っていて起き上がって歩こうとすると、倒れそうになるので、物につかまらなければならない。

全身の関節が痛くて、整体に毎週通ってましになったが現在も症状がある。整体に行きだして眠ることが出来るようになった。

現在も月1回通っている。

肩、頭、背中に物がのしかかっている感じで重痛い感じが続く。あんまをしてもらいたい感じがずっとある。右腰が重石が載っているような感じで足がだるい。

頭痛は輪っかをはめられている感じが1日中続く。

仕事が忙しいと、きりきり頭痛が続く。立ちくらみがある。

目は疲れやすい。脱毛が起きやすい。動きすぎると動悸する。

ニンニク過食不可、タマネギは食べられない。外食で胃腸がおかしくなることが多い。

便秘・下痢をくり返す。大便是2日に一度。青染みが出来やすく、立ちくらみがある。足が浮腫む(腎虚水沍)。雨の日、湿度の高い日は体調が悪い。1日に水2000ml程飲む(陰虚熱・口乾)。足先指先の冷えがあり、じんじんしびれる感じ(腎陽虚)があるが、寒がりではない・くちびるが割れやすい・幼少時から手掌が熱く発汗がある。(陰虚)。

明け方こぶらがえりが起きる(寒邪血瘀)。多夢(血虚)である。疲れてくると手が動かしにくくなり、イライラする(気虚血滞)。くよくよ考えて物事をきちんとしないと気がすまない(肝鬱)。

日本酒1~2合/日

既往歴:10才台は発熱しやすく口内炎の良く出来る虚弱な子供だった。高校生のとき腎炎と診断され、漢方薬を4年間服用して完治した。以前、全身の関節が痛くて、整体に毎週通ってましになった。現在も月1回通っている。ときおり寒冷蕁麻疹が出た。

現症:脈:72/分 沈細無力、舌体:淡紅 苔:薄、舌下静脈怒張
血圧104/66mmHg 左右下腹部:軽度圧痛

本症例の症候分析

- ①全身倦怠感・座っていて起き上がってあるこうとすると、倒れそうになるので、物につかまらなければならない→気虚陽陷
- ②全身の関節が痛くて、整体に毎週通ってましになったが現在も症状がある・肩、頭、背中に物がのしかかっている感じで重痛い感じが続く・あんまをしてもらいたい感じがずっとある・右腰が重石が載っているような感じで足がだるい・頭痛は輪っかをはめられている感じが1日中続く・仕事が忙しいと、きりきり頭痛が続く・舌下静脈怒張・左右下腹部軽度圧痛→気虚血滯→絡脈瘀阻
- ③イライラする→陰血不足→心不藏神
- ④動きすぎると動悸する・沈細無力脈→心気虚弱→心不主脈
- ⑤くよくよ考える・物事をきちんとしないと気がすまない→血虚肝鬱
- ⑥ニンニク過食不可、タマネギは食べられない・外食で胃腸がおかしくなることが多い・便秘・下痢をくり返す・大便は2日に一度→脾虚失運

- ⑦青染みが出来やすい→脾不統血
- ⑧立ちくらみがある・目は疲れやすい・脱毛が起きやすい
→肝虚血少・脳失血養
- ⑨多夢→心不蔵神
- ⑩幼少時から手掌が熱く、発汗がある・唇はかさかさしている・
疲れてくると手が動かしにくくなる・寒がりではない
→陰血不足
- ⑪足が浮腫む。雨の日、湿度の高い日は体調が悪い。
1日に水2000ml程飲む・足先指先の冷えがあり、じんじん痺れ
る感じがある→腎陽虚弱→水湿内停

弁証: 気血虚勞 絡瘀湿阻、

治則: 補益気血・理気活血・温陽化湿

方剤: X年3月6日から3月15日まで

体質改善①: 十全大補湯 加 柴胡2.5、枳実2、白芍薬2.5、
牡丹皮2、桃仁2、紅花2、厚朴2、陳皮2、沢瀉3、威靈仙1.5、
白芷1、炮附子1、牛膝2

効果がなかったため

X年3月16日より現在まで

体質改善②: 炙甘草湯合補中益気湯(炙甘草湯加黄耆4、白朮3、当帰3、陳皮2、柴胡1.5、升麻1)

X年5月26日より、6月8日まで

大防風湯32.5g*¹、加 陳皮2、柴胡1.5、川芎2、升麻1、を14日分処方。

*¹: 経験・漢方処方分量集—大塚敬節・矢数道明 監修—
尚、症状の程度は、Numeric Rating Scale(NRS:患者の症状の最悪を10とした場合の、其の時の症状を数字で述べたもの)で10以下の数字で表現したもの。

経過: 図1, 図2

次スライド（PP89）の解説参照

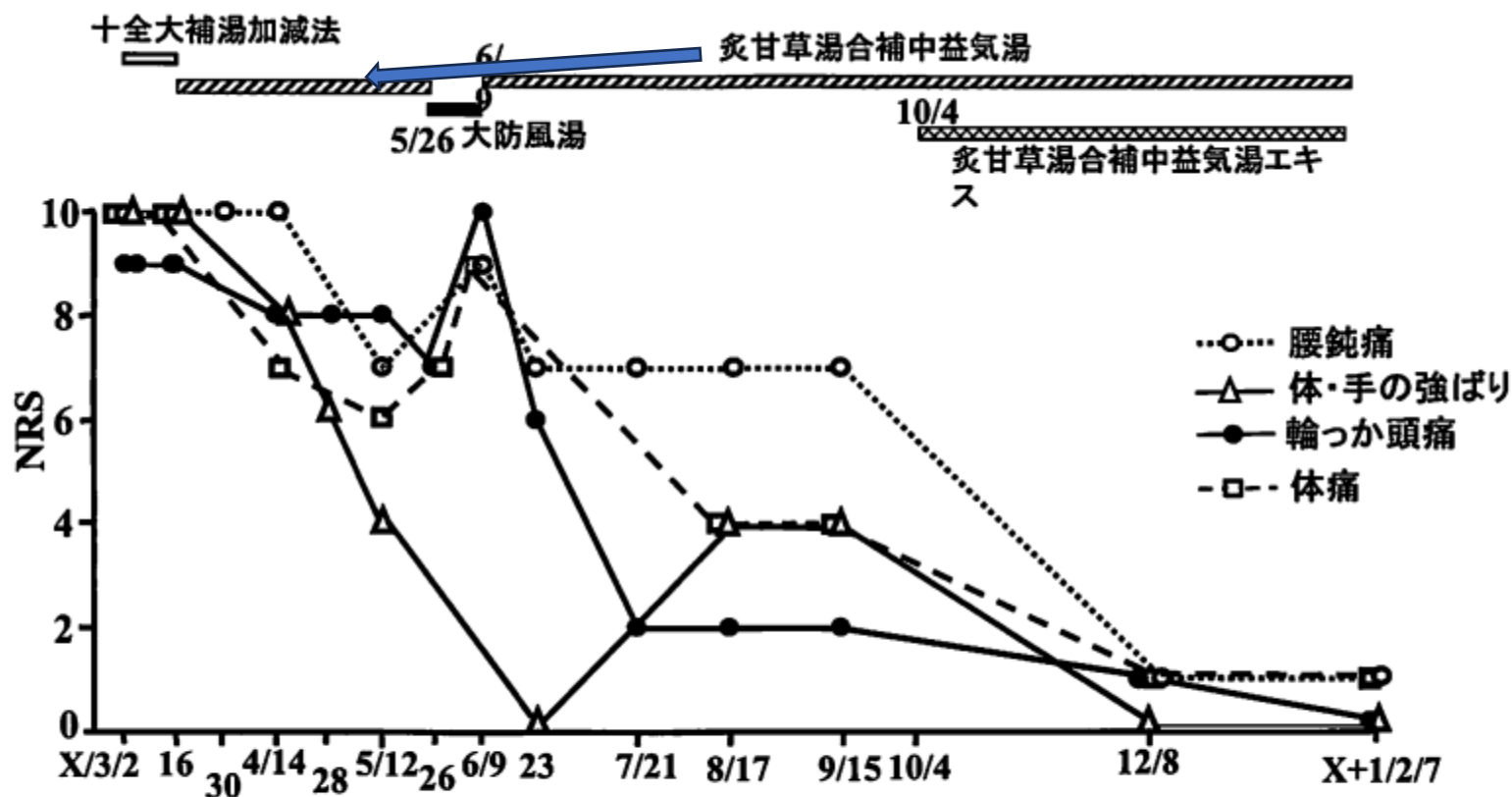


図1 漢方薬服用による、輪っか頭痛・体手の強ばり・腰鈍痛・体痛の変化

図1参照

痛みについては十全大補湯服用によっては、発熱があった以外、改善は無かった。

3月16日～5月1日まで炙甘草湯合補中益気湯加減方にもどしてから、徐々に改善したが、痛みが残ったため、5月26日～6月8日まで、大防風湯に変更した。

痛みは全て悪化した。

そこで6月9日から、炙甘草湯合補中益気湯加減方にもどしたところ、こわばり以外は全て改善傾向を示した。

10月4日以降、炙甘草湯合補中益気湯エキスを追加服用して、痛み関係が著減した。

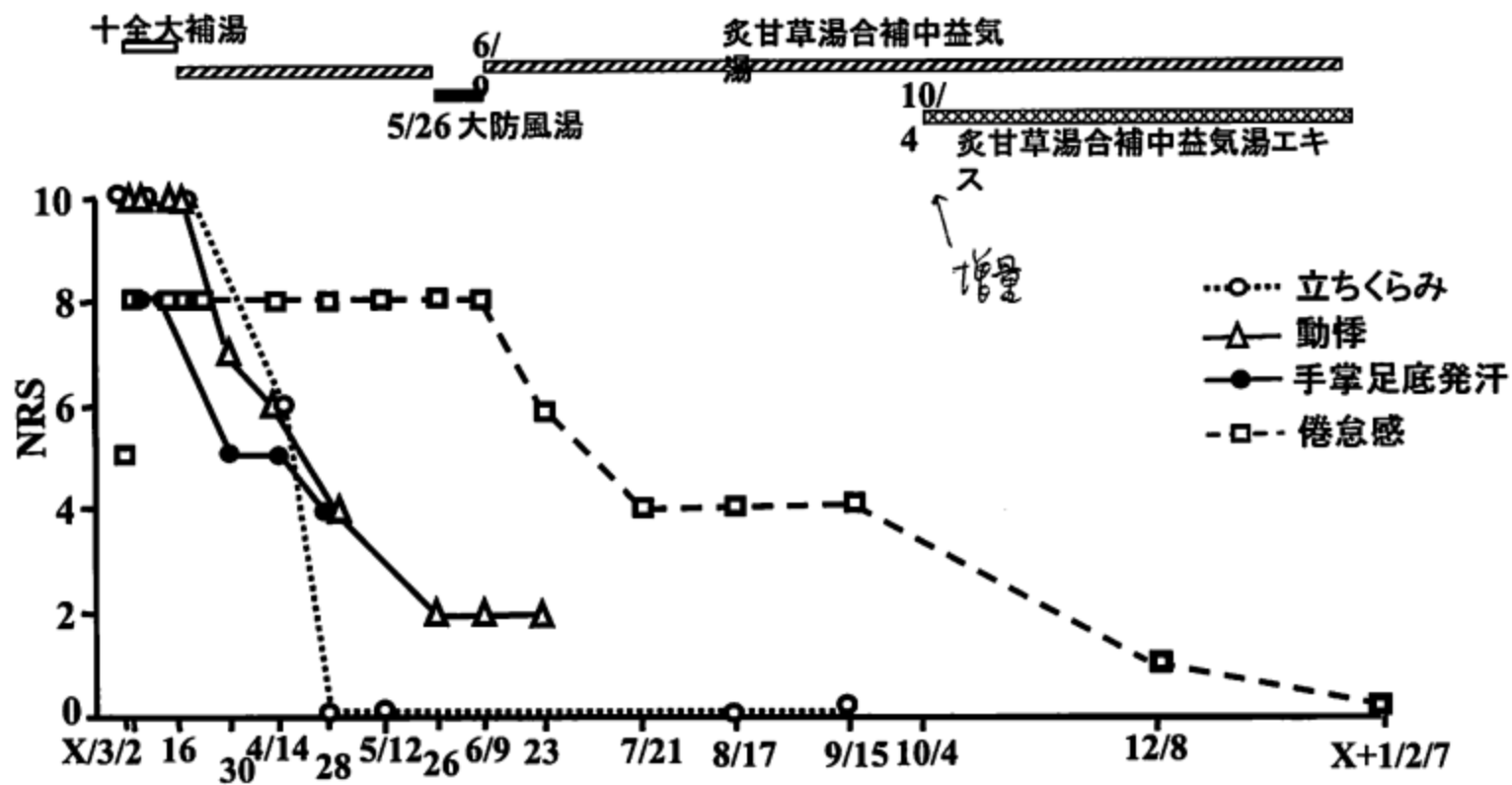


図2 漢方薬服用による、動悸・立ちくらみ・手掌足底発汗・倦怠感の変化

十全大補湯服用期間:3月2日～3月15日

著変無し→無効

3月16日から5月25日:炙甘草湯合補中益気湯加減方
→倦怠感以外全て改善した。

痛みが余り改善しないため、処方変更。

5月26日～6月8日まで、大防風湯に変更
→著変無く無効と判断した。

6月9日から炙甘草湯合補中益気湯加減方にもどして、
過労持悪化した以外は、改善傾向を維持した。

以後も、動悸、立ちくらみ、倦怠感かなり改善した。

恐らく炙甘草湯補気補陰作用、補中益気湯の補中益気効果
が寄与した。

10月4日以降、炙甘草湯合補中益気湯エキスを追加服用
して、全症状が急速にほぼ消失した。

考察

最初の体質改善①(十全大補湯 加 柴胡2.5、枳実2、白芍薬2.5、牡丹皮2、桃仁2、紅花2、厚朴2、陳皮2、沢瀉3、威靈仙1.5、白芷1、炮附子1、牛膝2)では、当初微熱が出て2週間目には解熱したが倦怠感があり、この患者には奏功しなかった。

十全大補湯加減はあっているとおもわれるが、柴胡の疏肝、牡丹皮・桃仁・紅花の活血、厚朴・枳実・陳皮の理気等は、気虚のこの患者には強すぎるのかもしれない。

身体痛に対し、威靈仙、白芷、炮附子、牛膝を投与したが、余り効いていない。

そこで体質改善②{炙甘草湯合補中益気湯}投与により、腰鈍痛、体手の強ばり、輪っか様頭痛、体痛、立ちくらみ、動悸、手掌足底発汗、倦怠感全て改善傾向をしめした。

残存する痛みに対して大防風湯を投与したところ、痛み関連は全て悪化した。

恐らく、気血両虚の風寒湿痺による疼痛というより、心脾気虚が強く、気虚血滞→絡脈瘀阻となり、これが炙甘草湯合補中益気湯により、補気活血され奏功したものと考えられる。

最後にこのエキスを併用して、処方を増加服用して、加速度的な改善がえられたのも、病態は心脾両気虚に血瘀を伴った痛みと考えられる。

動悸・立ちくらみ・手掌足底発汗・倦怠感についても、炙甘草湯合補中益気湯加減方で確実に改善し、補中益気湯4.5g/日(TJ41)、炙甘草湯4.5g/日の追加併用によって、急速に症状が消失した。

動悸・立ちくらみ・手掌足底発汗などは、血虚陰虚の症状もあるので、炙甘草湯の補心気補心陰は相生関係で補脾気補脾陰し、補中益気湯の補脾気がさらに強化し、速やかな改善に寄与したと考えられる。

又、必要な処方をエキ스로追加併用することが、こんなにも回復を促進することは、驚嘆すべき事実であった。

図には表現しなかったが、本症例は、起床後ふらついて、柱につかまらないと歩けなかったり、笑っても声を出すことができなかったり、少し働きすぎると動悸が激しくなったりするのが、灸甘草湯合補中益気湯加減が著効したのは、補脾補心気で急速に補気されたためと考えられる。

又、パソコン仕事でマウスを握る手が、こわばってフリーズしたり、全身の関節痛が続き、きりきり頭痛が持続し集中して仕事を出来なかったのは、重度の気虚による気滞血瘀の結果と考えられる。

又、服用後約2ヶ月後には体重が5kg減少したのは、当に脾虚生湿による湿滞が減少したことも寄与していると考えられる。

今回の講義のまとめ

疾病の主な発生要因には六淫(風・暑・湿・燥・寒・火)、七情、飲食、労倦、外傷などがある。

暑 湿 燥 寒 火(熱) それぞれの特徴、関連性(転化)が重要である。
風は六淫邪兼挟する
風＋痰で風痰となる (痰迷心竅、精神異常と運動障害の症例)

風邪: 気道症状、頭痛、めまい、痒み・皮疹、口眼歪斜、痙攣、意識障害
といった病症の原因としてありうる。(顔面神経麻痺の症例)

病理産物の治療には病邪に捉われず根本原因(気陰両虚、陰虚等)の治療も必要である。
(不妊、紫斑病、倦怠感身体痛の症例)

症例1 痰迷心竅 風邪＋痰→心竅に及んだ既往がある歩行困難、意思疎通困難の症例
質問1 桂枝加竜骨牡蠣湯 質問2 釣藤散 抑肝散
質問3 胸脇苦満
症例2 (寒邪) 9歳 顔面麻痺 入浴とマッサージ
症例3 気陰両虚陽虚、心気虚血瘀の 36歳 不妊症(寒邪、内熱、内湿、風寒)
症例4 2歳 IgA (HS)紫斑病 に駆瘀血、清陰虚熱(三物黄芩湯、黄連解毒湯)
症例5 40歳 気陰両虚 血瘀の症例 駆瘀血では効かず補剤で効果

正しい

ツボの見つけ方 押し方

監修：福辻鋭記
（アスカ鍼灸治療院 院長）



立体イラストでツボがわかる！